

第24号

実践女子大学

生活文化フォーラム

未来はワタシのなかにある

はじめに 巻頭挨拶

I 学科専攻の取り組み

①学科 学習支援 ②幼児保育専攻 ③生活心理専攻

II 実施報告

①フレッシュマン・セミナー ②常磐祭ゼミ活動報告

III 特集

①創立120周年イベント ②実践女子学園 創立120周年記念 公開講座 ③産学連携

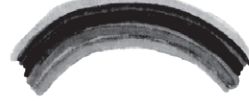
IV 学科報告

①授業紹介 ②研究活動紹介 ③就職活動体験記 ④卒論紹介 ⑤その他



第24号

実践女子大学



生活文化フォーラム

未来はワタシのなかにある

はじめに 巻頭挨拶

I 学科専攻の取り組み

①学科 学習支援 ②幼児保育専攻 ③生活心理専攻

II 実施報告

①フレッシュマン・セミナー ②常磐祭ゼミ活動報告

III 特集

①創立120周年イベント ②実践女子学園 創立120周年記念 公開講座 ③産学連携

IV 学科報告

①授業紹介 ②研究活動紹介 ③就職活動体験記 ④卒論紹介 ⑤その他



実践女子大学 生活科学部生活文化学科 2020年3月

二〇一九年度の 生活文化学科を紹介します



本学生活文化学科 教授 高橋 桂子

主任の高橋でございます。平素より本学科の教育にご理解・ご協力を賜り、誠にありがとうございます。ご案内のように、生活文化学科は生活心理専攻と幼児保育専攻の二専攻からなります。学生数はそれぞれの専攻で一学年約五十名ですから二つの専攻を合わせますと百人、四学年で四百人にのびります。他方、教員は十五名(教授七名、准教授五名、専任講師二名、助教一名)、助手は四名というスタッフ構成です。私も学科構成員十九名で、縁あって実践女子大学生生活科学部生活文化学科に入学された、青春真っ盛りの、しかも社会へ羽ばたく直前の大変に大事な四年間を過ごすことになった学生さんたちを、精一杯サポートしております。大事にしたいことを合言葉にして日々励行しているゼミもあるようで、大変、頼もしく思っております。

さて、本学科の新しい動き、特徴的な取り組みをご紹介します。まず、学科全体の話題です。本学科から五名の教員が次年度より本学大学院、生活科学研究科生活環境学専攻の教員として大学院生を研究指導することになりました。本学で大学院を持たない学科は私ども生活文化学科と現代生活学科の二学科のみで

す。教育の質は大学教員の研究の質と相関があると考えます。政治も経済も社会も目まぐるしく動く今日、大学が象牙の塔であつては、高等教育機関の存在意義がありません。大学卒業後の長い社会人生活の中では、暴風雨に見舞われることもあれば、予期せぬことにも遭遇するものです。高いレジリエンスを持つてしなやかに生きていくことはもちろんのことですが、高等教育機関に籍を置いた女子大学生たちには、専門知識を持って、かつ、自分で考えることのできるトレーニングを積んでいってほしいと思います。「え〜」「わからな〜い」で済むのは高校生まででしょう。大学では表面的な事象だけでなく、物事の真理、真髄を追究する。卒業論文では、一つで良いのでオリジナリティといえる部分があることも重要です。専門分野の最新知見を体得し、AI時代の新しい動きにもついていけるという自信ができてはじめて、仕事を継続していくこともできる、というものでしょう。データサイエンスや統計的知識、数学的思考などその事例の一つです。学部学生たちに、アカデミックな場や生き方のロールモデルを提供するためにも、大学院が身近にあることが求められます。来年度からようやく動きだします。これからは更に多くの先生方に大学院を担当頂きたいと考えております。

カウンセリングマインドを持ったビジネスパーソンとして活躍する「キャリア心理コースプログラム」の三つの緩やかなコースプログラムがあります。二〇一九年度入学生からは、正式に公認心理師に対応した新カリキュラムで動いております。一年生に希望調査したところ、「公認心理師を目指す」将来、大学院に進学する」と回答する一年生は約十人、全体の二割です。「国家資格を取得して故郷で働きたい」という学生さんもあります。彼女たちの夢や希望を、大事に育てていきたいと思えます。家庭科教員の採用試験では今年度は七名が受験いたしました。一次試験は見事、全員が合格しましたが、個人・集団面接、場面設定などからなる二次試験では残念ながら合格者が出ませんでした。知識力は申し分ないが、交渉力、コミュニケーション能力が今ひとつ、ということでしょうか。本学教職センターとも連携して面接力を醸成すべく支援していきたいと思えます。

他方、幼児保育専攻は、「幼稚園教諭・保育士コース」(幼保コース)と「小学校教諭・幼稚園教諭コース」(幼小コース)の二コースがあります。実習関係では、毎年、数多くの幼稚園、保育園や施設でお世話になり、あたたかなご指導を頂きまして、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

幼稚園教諭や保育士としての就職率は、継続してほぼ一〇〇%を維持しております。それぞれの園で「生涯にわたる発達」という眼差しをもって頑張っております。私事で恐縮ですが、前任校では附属幼稚園長として幼稚園と関わっております。幼稚園の三年間で園児は大きく成長していきます。年少

さんはまだまだ甘えん坊で動物的な存在ですが、年中さんになると個性も芽生えますし、無意識のうちに友達を模倣することや競い合いも始まります。誰かが「きのう、うどんを食べた」と言えば「ささず」え〜と、え〜と、スパゲティを食べた」「え〜と、え〜と、そば食べた」と続くのです。誰かが「きのう、縄跳びした」といえば「かけっこした」「水遊びした(冬なのに?)」。このやり取りが可愛くて面白くて、訪園するたびに「昨日は何を食べたの?」「何を遊んだの?」と聞いていたものです。一年間という短い期間でしたが、園児の生活を通して垣間見ることができた人間としての成長、個性の芽生えなどは大事にしたいものです。幼稚園や保育園で働くことは肉体労働であり、お給料もそれほど高くないかもしれませんが、人間としての成長の場に立ち会うことができる貴重な仕事のひとつだと思います。

また、小学校の教諭になるコースができて六期生が羽ばたきました。この六期生で累計三十四名が首都圏を中心とした小学校で教諭として教壇に立っております。誇らしいことです。文部科学省の方でも保幼小連携、カリキュラムマネジメントなど少子化を背景とする新たな動きも鮮明になってきております。複数の学校種での免許状を保持していることが教員採用試験の前提となっている都道府県もあります。関連動向に注視しながら、支援を行っていききたいと思います。

次年度は、今年度の動きを更に充実させ、他大学の同専攻学科との差別化をより明確にしていきたいと思えます。引き続き、ご指導ご支援のほど、何卒、宜しくお願い申し上げます。

学科専攻の取り組み

①学科 学習支援

- 1年生の学習支援について 6
渡辺 敏 本学生活文化学科 准教授
- 「公認心理師セミナー」の開催 7
長崎 勤 本学生活文化学科 教授
- 就活・キャリア形成アドバイスに関して 8
細江 容子 本学生活文化学科 教授

②幼児保育専攻

- 生活文化学科 幼児保育専攻
（幼保コース&幼小コース）の学び ～令和元年版～ ... 10
南雲 成二 本学生活文化学科 教授

③生活心理専攻

- 生活心理専攻2019 14
塩川 宏郷 本学生活文化学科 教授

■一年生の学習支援について

本学生生活文化学科 准教授 渡辺 敏

一昨年度より新生生の学習支援を生活科学部全体で取り組んでいます。その取り組みの一つとして「前期試験対策相談会」を昨年度に引き続き行いました。この取り組みは、一年生からの「前期試験にどのように取り組んだらよいかよくわからない」「大学での初めての試験なので不安である」等の意見に答える形で行われました。まず、一年生にアドバイスをしてくれる二年生の募集から始めました。生活心理や幼児保育の「基礎演習二」で趣旨を説明し、参加できる学生を募集しました。生活心理専攻二年生のKさんは「学生寮で一年生からテストについてよく聞かれるので参加しました」と、参加理由を話してくれました。

前期試験まで一カ月足らずとなった七月初旬の昼休み、香雪会館の二階で学習相談会を行うことになりました。広い会場を生活心理と幼児保育の二つに分け、それぞれの会場の四隅に二年生が座り、その周りに椅子を並べ一年生が自由に質問できるようにしました。あえて教員は参加せず、一年生がフランクに二年生へ質問できるように心がけました。

一年生は特にテストの取り組みについて授業ごとに質問していました。「授業でとったノートをよく読んでおいた方がいい」や「〇〇



がどのような教育的な仕事をしたのか復習しておいた方がいい」などの具体的なアドバイスが二年生から聞こえてきました。また、「できるかどうか不安」という一年生には「大丈夫。しっかりと書けば単位を落とすことはないから」と二年生が積極的に励ます姿も見られました。

生活心理、幼児保育ともに参加者は二十名弱と、一年生の全人数からすると四割程度の参加となりましたが、不安に思っている学生にとっては有意義な時間になったようです。このような機会を持った一年生が来年度二年生になり、新たな入学者に同じようにアドバイスできるようにすると縦のつながりもでき、よい循環が生まれるのではないかと考えています。

また、一年生、二年生のつながりだけでなく、他の学年同士でも学習のつながりを作っていければと考えています。三年生は最終学年を前に就職についての悩みを持つようになり、保育士や幼稚園教諭、学校教諭など公務員試験を受けようか迷っている学生は、既に試験を経験した学生に、どのように計画的に取り組んできたのか、どのような内容の勉強をいつから始めたのかなど聞けると、三年生の春休みから四年生にかけて自分がどのような学生生活を送ればいいのか具体的なイメージを持てるようになります。

このように、入学から卒業、就職までを学生同士が支援し合えるように、今後も教員が適切な場を学生と相談しながら作っていきたいと考えています。



■「公認心理師セミナー」の開催

本学生生活文化学科 教授 長崎 勤

今年度の一年生より正式な国家資格・公認心理師受験資格取得のためのカリキュラムが始まり、将来、公認心理師の取得をめざす学生のための「公認心理師コース」が他の「家庭科教員コース」「キャリアコース」と共に発足しました。公認心理師コースでは、年に何回か、卒業生や現場で活躍されている方をお招きして、セミナーを持つことになり、二〇一九年七月二十七日(土)に、二〇一九年度第一回公認心理師セミナー卒業生から発達支援の仕事を学ぼう―が開催され、一年生と四年生あわせて一四名が参加しました。

第一回目の講師は、二〇一七年度・生活心理専攻卒業生の見田里緒氏(よこはま港南地域療育センター)でした。見田先生は生活心理専攻の第一期卒業生です。演題は「よこはま港南地域療育センターにおける障害児の発達支援」で、現在のお仕事の様子や、学生の皆さんへのメッセージをお話し下さいました。

よこはま港南地域療育センターでは、〇歳から小学校六年生までの児童を対象に、横浜市総合リハビリテーションセンター及び地域の関係諸機関と連携して、療育に関する相談から診断・評価・指導・訓練にいたるまで専門職員が一貫したサービスを実施しています。スタッフは、医師、看護師、心理士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、ソーシャルワーカー、保育士、児童指導員など多彩な職種がチームで働いています。そして療

育を受ける流れの説明があり、見田先生が働いている部門「ぴーす港南」が、主に知的な遅れを伴わない高機能自閉症のお子さん(四〜五歳児)で、社会性やコミュニケーション、集団活動に問題のあるお子さん達のクラス(一クラス六〜七人、担任二人)であることの説明があり、典型事例についても紹介がありました。お子さんの表面的な問題の背景にある問題を見つけ、そこをベースに支援していくことの重要性などについてお話し下さいました。

また、働く中での楽しさ・よかったこととして、お子さんとの関わり、お子さんの問題の改善(成長)を感じた時や、日常の中でも自分や周りの人の言動について冷静に考えられるようになり、気持ちに余裕がもてるようになったこと、働く中での大変さ・難しさとして、お子さんの行動から隠れた問題を見つけること、それをどう支援していくかや、お子さんの課題を親御さんと共有すること、体調面・体力面の管理などを挙げておられました。

大学生活では、たくさんレポートが大変だったが、今思えば出すと、そのことを通して計画性が身についたことや、四年生で国家試験を受け保育士資格をとったことなどを話されました。学生へのメッセージとして、旅行・友達との関わりなど、自分の時間を大切にしたい、また、ボランティアやアルバイトなど、学外の経験も大切にして欲しい、などのお話がありました。

学生からの質問は、ゼミでの活動や、保育士資格の取得の仕方などがあり、見田先生からはゼミでの臨床活動がこういった方面への就職の動機になったことなどを話されました。(本セミナーは生活科学部「学部教育改革事業」の補助を受けました。)

I 学科専攻の取り組み

①学科 学習支援

■就活・キャリア形成アドバイスに関して

本学生生活文化学科 教授 細江 容子

文部科学省「平成二十七年学校基本調査(確定値)」によると、学部卒業者に占める就職者の割合は、平成二十二年度に急激に低下したが、その後五年連続で上昇し平成二十七年度は七二・六%となり、「正規の職員等である者」は六八・九%であった。また、「正規の職員等でない者」は三・七%、「一時的な仕事に就いた者」と「進学も就職もしていない者」を合算した割合は一二・四%であり、学部学生への就職やキャリア形成に関する支援が、大学における一つの課題となっている。今日インターシッピングの量的拡大と多様化が進み、学生たちはインターネットを用いそれらへ自由に複数参加することが一般的になっていく。大学での就業力・職業観の育成や、就職後の職場定着とキャリア形成のための学習支援が進められている。

ここでは、生活心理専攻四年生の作成した報告資料(池島奈々子さんが作成)を基に四年生の三年生に対する「就活・キャリア形成アドバイス」について述べる。

「就活・キャリア形成アドバイス」の会は、先輩が後輩に対し自分たちが経験した生の声を伝え、その経験を糧に就活・キャリア形成をより実り多いものにしてもらおうと企画されたもので、通称「縦の会」と呼ばれるものである。この会は、学科の「学習支援事業」の一環として、四年生による企画・運営により三年生を対象に(他学年の出席も可能)七月三〇日に実施された。

き出して明確に伝えられるようにした。面接では、いかにその企業へ入りたいか、その気持ちをどれだけ伝えられるかがカギとなる。本命の企業の前にいくつかの企業を受けて知らない人(人事の人)に自分のことを伝える経験を積み重ねることが一番だと感じた。

面接は最低限のマナー・言葉遣いやハキハキと話すこと、また集団面接なら他の人の話を聞く姿勢も大事だと感じた。職種・業種によつては話す内容よりもテンポが重要視されるので、どんな質問がきても答えられるように、いろいろなエピソードの引き出しを増やしておくことも大事だと感じた。

三年生に向けたメッセージ

気軽に説明会に行つて、楽しくおしゃべりすることで、ストレスの高い就活を乗り切ることができると感じた。就活を楽しまないと途中で辛くなる。人数が少ない大学だからこそ、周りの状況が耳に入り不安になる場合も多いが、就活は速さではないので、焦らないで最後まで自分のやりたいことをあきらめないで頑張つてほしい。就職活動を始めた最初の段階は、自分との戦いだと思う。孤独感と戦い、どういふ人生を歩めばいいか自分を見つめ、自分に合う会社を見つけていかなければいけない。選考の結果が出てくる時期には、選考に合格すればもちろん嬉しいが、落ちた時の落胆度は大きい。毎日選考を受ければ毎日



4年生との懇談

れたものである。

報告内容は、インターシッピング編、就活編、三年生に向けたメッセージ編に分かれているが、ここでは紙面の関係から、就活編(SPIの準備について)、三年生に向けたメッセージ編を中心に述べる。

就活編

特に多くの三年生が不安を覚えるSPIでは、学校で行われる対策講座に出て解き方を学び、その後、自分で本を買って解いたりした。数学は解き方を忘れてしまったので、一からテキストを見ながらやり方を覚え直し、何度も解いて頭に定着させた。国語はアプリを活用して移動の時間などにやれるようにし、分からなかった漢字やことわざは調べて覚えた。

さらにSPIは、面接前に足切りになってしまふ可能性もあり、就活解禁直前になると面接対策で忙しくなるため、早めに対策を立てて準備を行うことが必要だと感じた。

合格のための対策としては、何を聞かれても答えるようにし、間違つていてもとりあえず話してみることが大切だと感じた。また、将来どうなりたいか自己のキャリア形成についてもしっかり考え、自己分析を十分に行うことが大切だと感じた。面接はどの会社も必ずあり、多くの人は「回数こそなせ」と言う。やっているうちに慣れていくが、やはり緊張するので、セリフを覚える様な対応ではなく「自分のこころは伝える」という部分を書

結果が届き、なおさら精神をすり減らす可能性もある。その時に、これでいいやと思つて内定を承諾するか、まだあきらめずに頑張ろうと思えるかは自分次第だと思う。落ち込んだ精神を元に戻すのは容易なことでないが、結果を受け止めて前向きに考えられるようになれば、きっと自信もつくし奮起できると思う。良くない結果が来たとしても、そのプロセスで鉄の精神になつていくはずである。また、自分の得意不得意もわかるはず(書類が苦手、面接が苦手など)、面接は避けることができないが、場数を踏み何回もシミュレーションすればきつとうまくいく様になる。六月になると髪色で一目瞭然、周りの子たちの就職が決まつてくる。でも、「人は人」と思い、友人の内定は心から祝い、「自分も頑張るぞ」と自らを奮起させることが大切である。

就活は長期戦のため常に緊張状態が続く、精神的にかなり参つてくる場合が多い。緊張状態が続くとストレスをため込むことにもなるので、友だちと会つて息抜きしたり、バイトをしたりとバランスよく過ごして乗りきることが必要である。

準備は早いに越したことはないで、自己分析などは行つておいた方が取り組みやすい。就活中は自分が成長できる大事な期間だと思うので、面倒くさがらず沢山悩んで、やりたいことを見つけて前向きに頑張つてほしい。

このような先輩の生の声を聴くことのできる「縦の会」は、学生による学生のための貴重な「学習支援の会」といえ、それを企画・運営することのできる四年生が育つていくことを教員として誇りに思う。



4年生の報告

幼児保育専攻

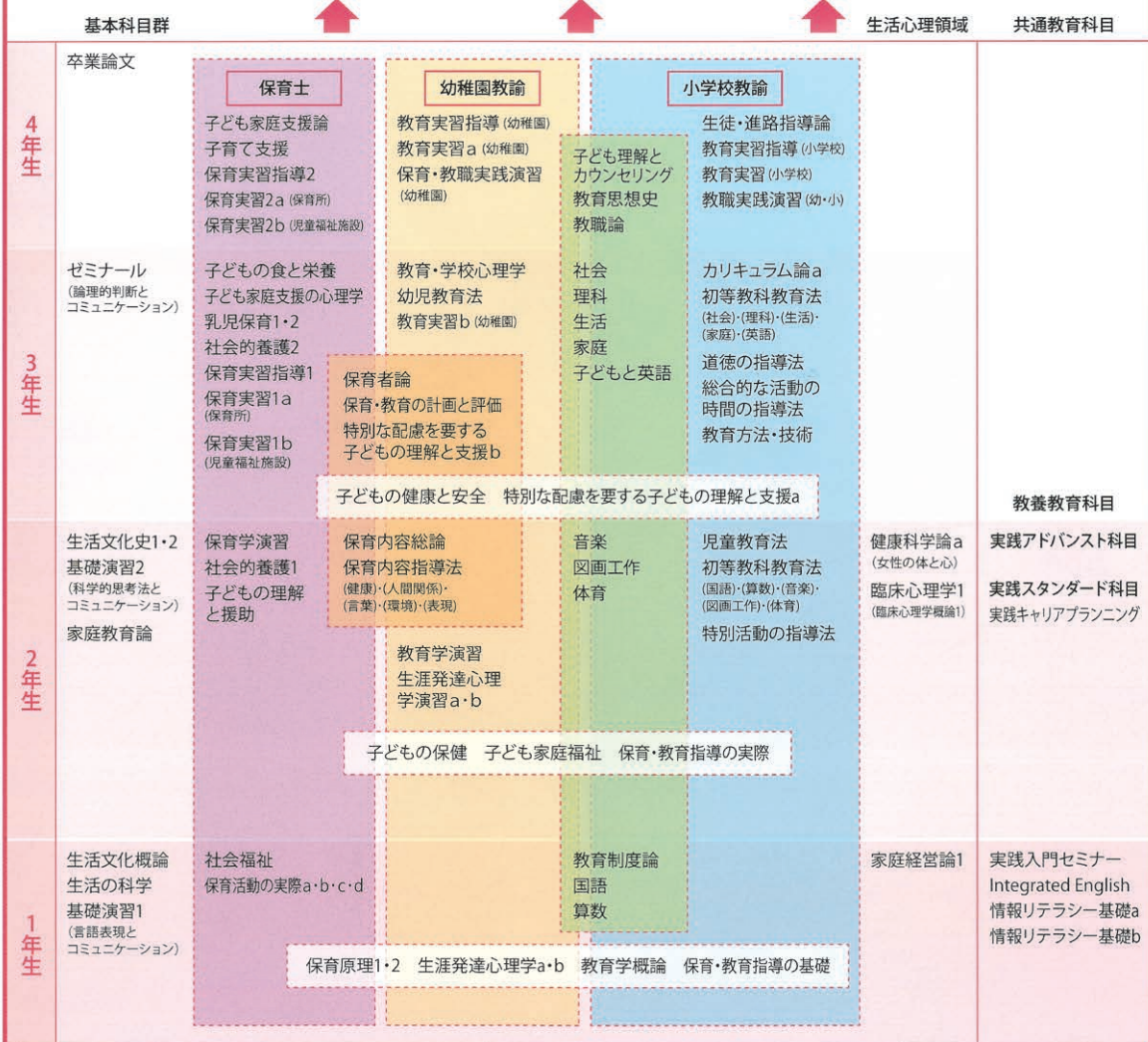
—— 広範な知識と柔軟な思考力を備えた保育・教育の専門家を目指します ——

●**幼児保育専攻では……** 保育、教育、福祉、保健・医療、心理（認知・発達・教育・社会）などの専門知識を身につけ、子どもに豊かな愛情を注ぎながら、その生活や学びの基盤をつくり健やかな育ちを支える保育者・教育者を養成しています。

期待しています！
(アドミッション・ポリシー)

- 子どもや保育・教育に興味がある。
- 心身ともに健康である。
- 誠実で素直な心を持っている。
- 地道な努力を惜まず、様々なことに積極的に取り組める。
- 多様な価値観を受け入れ、他者と協力できる。
- 学ぶ意欲があり、学び続けることができる。

生活文化学科DP	社会貢献	総合的理解力	人間形成力
	生活文化の向上を目指し、社会に貢献しようとする態度	生活文化を総合的に理解する力	人や社会とつながる力
幼児保育専攻DP	協働して取り組む態度	保育・教育者としての専門的理解	保育・教育者としての実践力
	保育・教育分野において社会に貢献しようとする態度	子どもや保育・教育を総合的に理解する力	保育・教育を実践する力



生活文化学科 幼児保育専攻

(幼保コース&幼小コース)の学び (令和元年版)

本学生活文化学科 幼児保育専攻長 教授 南雲 成二

南雲が実践女子大学日野校舎「生活科学部生活文化学科」にご縁をいただいで七年前、幼児保育専攻「幼保コース」を頼りがいのある姉として持ち、妹としてスタートさせてもらった「幼小コース」も、第六期生を送り出すところまで来ました。

学祖下田歌子先生の遺訓は、「女性の清らかな徳性と豊かな情操をもって社会の弊を正せ」であり、「内剛にして外柔なれ」、「品格高雅にして自立自営しうる女性」でした。保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の養成・育成は、まさにその具現化の一つであると、スタッフ一同、誇りを持って受け止めています。

生活文化学科の学びの基本は、「社会の影響を受けて変容する『人の生活のありよう』を学ぶこと」であり、「生活のありようを形づくり社会の源ともなる『人の生涯にわたる発達・成長への眼差し』を持って生活を探究し、実践すること」です。

ですから次頁に詳しく構造化して表現させていただいたとおり【幼児保育専攻の学びと実践】は、『広範な知識と柔軟な思考力（受容力と表現力）を備えた保育・教育の専門家育成を目指します』にあります。平成最後の年、令和がスタートした年、本年度の取り組みは、次次頁の『生活文化学科 幼児保育専攻 選べる・見える・未来の姿』未来はワタシのなかにある』に詳しくまとめられています。是非お読みください。

国語教育学研究室 南雲 成二	初等教育学研究室 (算数) 渡辺 敏	音楽教育学研究室 越山 沙千子	社会福祉学研究室 大澤 朋子	運動生理学研究室 島崎 あかね	幼児教育学研究室 井口 眞美	保育学研究室 松田 純子	教育学研究室 田中 正浩	二〇一九年度オープンキャンパス 各ゼミ担当者テーマ
☆ことばとこころ育ての小学校国語科教育実践 「詩」の学習づくり	☆ナンバードゲームで算数の授業を体感しよう	☆子どもと音楽 (音を見て、さわって、感じて)	☆「これからの社会的養護」施設か里親かの対立を超えて	☆運動遊びの必要性を考えてみよう 子どもの生活と健康について考えよう	☆保育現場での遊びの様子を知ろう 『子どもたちの一年間』を知ろう	☆紙芝居の はじまりはじまり 紙芝居の魅力を探る	☆教育を見る目を養う 校則を見る「学級崩壊」を見る	

実践女子大学 生活科学部 生活文化学科 幼児保育専攻の特長

①少人数制による学習環境

1学年定員45名という少人数制で教育を行っています。教員と学生の距離が近く、きめ細やかなサポート体制が整っています。学生は互いに思いやりながら、アットホームな雰囲気の中で学んでいます。



②異学年交流による学習支援

入学時より履修や学習に関して上級生のアドバイスを求める機会が多くあります。また、小学校教員を目指す学生が情報交換を行う交流会や、ゼミを選ぶための相談会、卒業生による特別授業も開かれます。



③人と人との出会いを紡ぐ授業「礼法」

幼児保育専攻の学生は年に2回、礼法の専門家であり、本学の卒業生でもある特別講師による授業を受けます。4年間を通して、実習生や社会人としての心構えやマナーを身につけます。



④心理学分野の豊かな学び

生活文化学科は、幼児保育専攻と生活心理専攻の2専攻体制となっており、専攻の垣根を越えた学びを深めることができます。



⑤地元・日野市との連携

子育て支援が充実している日野市内の幼稚園、保育所、小学校、福祉施設等との緊密な連携を図り、実習やボランティア、地域活動等を通して多くの学びの機会を得ています。



卒業生の活躍

幼児保育専攻の卒業生の多くが、資格や免許を活かし、保育や教育の現場で着実にキャリアを積んでいます。園長をはじめ、後輩を育てる立場として活躍している卒業生もいます。

卒業生の声

先生との距離が近く、アットホームな雰囲気の中で学べたことが良かったです。卒業後も研究室を訪ねると、快く相談に応じ、応援して下さるのが嬉しいです。

実習先の声

幼児保育専攻の学生は真面目で親和性が高く、実習先でも好意的に受け入れていただいています。

福祉施設の実習担当者より

明るく積極的で、マナーも良く、学びの姿勢に好感が持てます。こちらからも積極的に一步踏み込んだ指導をしようと思えます。ボランティア経験を積んでいることで、スムーズに実習を行うことができます。



実践女子大学 生活科学部 生活文化学科 幼児保育専攻

選べる 見える 未来の姿
～未来はワタシのなかにある～

●幼稚園教諭・保育士コース

幼稚園教諭一種免許と保育士資格を取得し、幼稚園・保育所・認定こども園の保育者、児童福祉施設の職員を目指します。

●小学校教諭・幼稚園教諭コース

小学校教諭一種免許と幼稚園教諭一種免許を取得し、主に小学校の教員を目指します。幼小接続に関する理解の深さが強みです。

コース選択は入学時に行いますが、1年次の様々な科目での学びを経てコースを変更することも可能です。



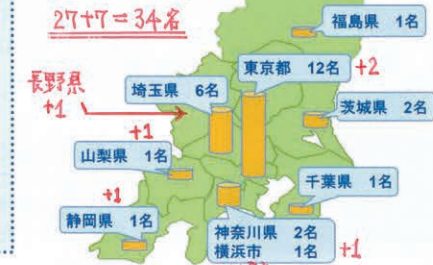
高い就職率

幼稚園・保育所・認定こども園への就職率は100%です。地元の日野市をはじめ、公立園に就職した卒業生も多くいます。多くの卒業生がそれぞれの現場で活躍していることが誇りです。

また、「小学校教諭・幼稚園教諭コース」の過去5年の卒業生40名のうち、27名が公立小学校教諭、7名が幼稚園教諭、児童館職員、医療事務職員、地方公務員として、6名がアパレル、ホテル・観光、プライダグ系企業で活躍しています。学生一人ひとりが目標に向かって、仲間とともに努力しています。

小学校教諭として活躍する卒業生
(1期生～5期生:計27名)

プラス 6期生 7名
27+7=34名



“緩やかな”3つのコースプログラム



■生活心理専攻二〇一九

本学生生活文化学科 生活心理専攻長 教授 塩川 宏郷

二〇一四年に改組が行われ生活心理専攻としてスタートし、本年で五年目を迎えました。今年入学した学生は第五期生にあたります。この五期生から新たに公認心理師を目指すためのカリキュラムがスタートし、「緩やかな三つのコース」プログラムが本格始動することになります。「緩やかな三つのコース」プログラムとは、次ページの図に示した通り「公認心理師コース」「家庭科教員コース」「キャリアコース」それぞれのプログラムをさしています。

公認心理師コースは、二〇一八年から始まった公認心理師の国家試験受験のための必須科目（学部）をそろえ、将来国家試験受験を目指す学生向けのコースです。家庭科教員コース、キャリアコースは、それぞれ心理学をベースに「カウンセリングマインド」を身につけ、学校教育の現場で、あるいはあらゆる職場・家庭でその力を発揮する人材育成を目指すコースで、本専攻の長い歴史と実績を積み重ねてきているコースです。学生たちはこれら三つのコースプログラムを参考に、自分が思い描く将来像に向けて学修に取り組みます。コースは「緩やか」に分かれており、共通する部分や互いに補う部分もあるため、一つのコースに所属したら他のコースの科目は履修できないということはありません。学生たちは緩やかに波にゆられるように学修をすすめ、四年間で自らの進路を見つけていきます。

公認心理師とは、二〇一七年に成立した公認心理師法に基づ

公認心理師とは（公認心理師法より）

「公認心理師法」にもとづき、「公認心理師（または心理師）」の名称を用いて、活動できる文部科学省・厚生労働省共管の国家資格。保健医療、福祉、教育、産業、司法などの分野で、心理学の専門的知識と技術を使って、以下の業務を行う。

- 1) 心理に関する支援を要する者の心理状態の観察、その結果の分析
- 2) 心理に関する支援を要する者に対する、その心理に関する相談及び助言、指導その他の援助
- 3) 心理に関する支援を要する者の関係者に対する相談及び助言、指導その他の援助
- 4) 心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供

公認心理師試験の受験資格を得て、公認心理師試験を受験し、合格することが必要です。

アセスメント

支援

コンサルテーション

予防

く国家資格で、名称を独占し心理学の専門的な知識をもって保健・医療・教育・福祉等の領域で活動する役割を担います。公認心理師は「アセスメント」「支援」「コンサルテーション」「予防」の四つを主な業務として行うことが期待されています。アセスメントとは心理的支援を求める人の心理状態を観察し、結果を分析し、支援に生かす行為です。支援は主として心理学的な立場からの助言・指導・相談活動をさします。コンサルテーションとは他領域から心理学的な意見を求められた場合に関係者に対して助言指導などを行い連携していくことを指します。また、心の健康に関する知識や知見の普及・理解を促進し疾患や障害状態の発生を予防することも求められます。

公認心理師になるには、受験資格を得て国家試験に合格する必要があります。本専攻で今年度スタートした公認心理師コースプログラムは、公認心理師を目指す学生が学部で学ぶべき科目をそろえ、受験に向けて学生の利便性を高めています。ただし、国家試験受験のためには大学院修士課程での単位取得と臨床実習、または特定の施設における二年以上の実務経験が求められていますので、このコースを修了してすぐに国家試験受験資格が得られるわけではありません。本専攻としては今後、大学院の教育プログラムについても整備していく予定です。

家庭科教員コースでは、従来通り家庭科教諭一種免許（中・高）や社会調査士の資格の取得が可能です。またキャリアコースでは、社会調査士に加え、ほぼ全員が認定心理士、認定心理師（心理調査）の資格を取得できます。



に所属し、卒業研究・卒業論文執筆に向けた基礎的な知識・技能の習得を目指します。生活心理・幼児保育両専攻ともに特色ある研究を行っている研究室が多数あり、学生たちの興味関心や知的欲求に応えています。次ページの写真は、学科名物、タテ



カンならぬゼミの「タテパネ」です(生活心理専攻のもの)。生活心理・幼児保育両専攻のゼミがそれぞれの特徴をアピールしています。秋から冬にかけて、四館の四階廊下はとて賑やかになります。興味のある方は是非一度ご訪問ください。

生活心理専攻独自の活動としては、公認心理師フォーラムの開催、学内公開セミナーの他、例年開催されているメンズキッチン、シニアコンピュータ講座など地域住民との交流を含む活動を行いました。

今年度初めて開催された公認心理師セミナーでは、実際に心理支援職として活動を始めた本専攻の卒業生をお招きし、一年生と心理支援職希望者に対してレクチャーと質疑応答をしていただきました。医療福祉機関での心理支援職の業務内容や、忙しさを大きく上回るやりがいなど、生の声を聞くことができ、聴講した学生たちは大きなインパクトを感じ、学修に対する動機付けを高めたようでした。

学内公開セミナー(「大坂上みのり亭」というネーミングです)も今年度初めて開催したのですが、近年増加していると言われていた発達障害(自閉症スペクトラムや注意欠如多動症など)や思春期青年期の精神疾患とその治療について、連続講座のような形式で五回開催しました。学生の参加はほとんどありませんでしたが、相談センタースタッフや教員、事務職員が毎回一〇名程度参加し、個別のケース相談も含めて有意義な意見交換・情報交換を行うことができました。

実習関係では今年度の試みとして、従来四年生が行っていた心理実習をインターンシップと組み合わせ「生活心理実習(インターンシップ)」として開講しました。生活心理専攻三年生が、心理領域とは異なる業種の企業のインターンシップに参加し、自らの思い描く将来像の一つとして取り入れていくことにつながる貴重な体験をすることができました。実習の報告会では、

それぞれの経験をもとに今後の学習への意識を高め、ボランティア活動やさらなる実習への希望が語られました。三年生と四年生が同時期に実習に行くことになったため、オーガナイズする教員や訪問指導する教員の負担が増えてしまいました。学生にとっては得ることが多い実習になったと思われ、今後行う実習については時期や内容も含めて検討する必要があります。三年後には公認心理師受験を目指す学生向けの実習が医療機関でも行われることとなりますので、今回の実習を参考にしていくなかで進めたいと思います。

その他の活動として、例年通り今年も常磐祭(日野キャンパス)で生活心理専攻のいくつかのゼミメンバーが出演し好評を得ました。長崎ゼミでは、おなじみカルピスカフェと発達に障害のあるお子さんの音楽療法に関するシンポジウムを行いました。シンポジウムのフィナーレではダウン症当事者による演奏会と会場の子どもたちとのセッションがあり、賑やかに幕を閉じました。また、作田・水野ゼミによる心理学プロムナードは会場を散歩しながら心理学の面白さ・不思議さに触れる内容で、心理学に関心を寄せる中学・高校生にも好評でした。ゼミに所属する学生だけでなく多くの学生が専攻の枠を超えて参加し運営をサポートしていただきました。今後も専攻として常磐祭を盛り上げる活動をしていきたいと思います。

生活心理専攻は幼児保育専攻とともに、学生ファーストの心意気をもって教育に当たっています。二年生の後半からはいよいよ本格的な専門科目がスタートし、同時に卒業研究に向けてのゼミ選択もこの時期に行われます。ゼミは専攻教員の研究室

Ⅱ

実施報告

①フレッシュマン・セミナー

- 生活文化学科新入生研修…………… 20

水野 いずみ 本学生活文化学科 准教授

②常磐祭ゼミ活動報告

- 『ダンボールランド』～子どものための遊び場づくり～ …… 24

松田 純子 本学生活文化学科 教授

■生活文化学科新入生研修

本学生活文化学科 准教授 水野 いずみ

1. 生活文化学科新入生研修の概要

生活文化学科では、毎春、新入生を対象とした研修を行っています(表1)。二〇〇五年から二〇一五年までの十一年間は一泊二日の宿泊研修(フレッシュマン・キャンプ)、二〇一六年から現在に至るまでの四年間については本学日野キャンパスにて日帰りでの研修(フレッシュマン・セミナー)を実施しています。新入生研修は、二〇〇五年に生活文化学科が生活文化学科コース・保育士コースの二コース制に移行することを機に開始しました。

第一回の新入生研修(第一回(二〇〇五年)フレッシュマン・キャンプの感想から)および写真1・写真2)は、武蔵嵐山に位置する国立女性教育会館で実施しました。体育館でのレクリエーションでは、誕生日順に手をつないで円になる「バースデー・チェーン」で仲間との仲を深めたり、当時生活文化学科で行っていた新入生対象の演習「基礎ゼミ」(現在全学的に行われている「実践入門セミナー」の前身の授業で、一年生の前期に行われていた。生活文化学科の全専任教員が担当し、研究室などで複数回のゼミナールを行う形式である。新入生は少人数グループに分けられ、複数の教員のゼミナールを順に経験していった)に分かれ、ドッジボールなどの対抗試合で身体を動かしたり、近隣の河原でバーベキューなどを楽しんだり

しました。翌年の第二回新入生研修からは、日野市隣接の八王子市に位置する大学セミナーハウスに場所を移し、当時既に経験することが難しくなっていたキャンプファイヤーやフォークダンスなどのレクリエーションを堪能していました。学生は、キャンプファイヤーの薪の組み方をセミナーハウスの方に指導していただいたり、火の管理の仕方などを生活文化学科専任教員から教わったりしていました。また、これらの宿泊研修においては宿泊室の整え方など、基本的ではありませんが、身につけることが難しくなっていた事柄について、新入生は上級生であるリーダーから教わり、その姿について宿泊先の職員の方から好意的な評価をいただいたことも思い出されます。日帰りでの研修に移行してからは、普段通学しているキャンパスにより親しみを感じてもらえるよう、リーダーが趣向を凝らした取り組みに励んでいます。

第一回の新入生研修では、二〇〇五年次四年生がリーダーとして活躍し、第二回(二〇〇六年)からは、新入生として研修を経験した上級生がリーダーとして研修全般を実施しています(第二回(二〇〇六年)フレッシュマン・キャンプ・リーダー二年生(第一回フレッシュマン・キャンプ一年生)から新入生へのメッセージ)。そのため、二年生にしておよそ一〇〇名への研修を取り仕切ることとなります。二年生だけでなく、三・四年生もリーダーとして活躍し、上級生リーダーが下級生リーダーのよき先輩としての役割を果たす姿もみられていました。上級生リーダーの姿は、入学してまもない新入生にとっても、

四年生になった時の自分自身をイメージし、四年間の大学生活について様々な思いをめぐらせる上での助けとなっていたようです。そして、一年生から四年生までの学生が縦のつながりを独自に形成し、大学生活で直面する諸々の課題を学生どうしで解決していく様子もみられました。状況などの変化に伴い、現在はリーダーの学年構成も変化していますが、生活文化学科新入生研修は、新入生だけでなく、在学生にとっても様々な意味をもたらす場となっていることに変わりはありません。

また、新入生研修は、教職員にとっても様々な意味をもたらす場となっています。宿泊研修に関しては、限られた範囲ではありますが寝食を共にしますので、キャンパス内外を含めた学生生活全般について様子を知る良い機会となり、以降の学生指導の助けになっていったと思われます。本学キャンパスでの日帰り研修に関しては、キャンパス内で通常の授業時とは趣の異なる関わりをもつことによる良さがあると思われます。これらは研修の各形態による良さですが、研修の形態にかかわらず、新入生研修を通して、教職員と新入生のみならず、在学生についても、互いを知り、人間関係を形成する機会になっていると考えられます。そして、教職員にとっては、各学年のみに注目した学生指導や教育活動を行うのではなく、四年間の学生の育ちをふまえて、単なる学生指導にとどまらない、授業を含めた教育活動を適切に行いやすくすることができるとなっていると思われれます。

表1 生活文化学科新入生研修のあゆみ

実施時期	場所	形態
2005年	国立女性教育会館(埼玉県比企郡嵐山町) ※生活文化学科コース・保育士コース1期生入学	宿泊 (1泊2日)
2006~2015年	大学セミナーハウス(東京都八王子市)	
2016~2019年	実践女子大学日野キャンパス	日帰り

第一回(二〇〇五年)フレッシュマン・キャンプの感想から

今思うとあっという間の二日間でした。入学して一カ月が過ぎてやっと慣れたとはいえず、キャンプに参加したのと同じような感覚で友達の数も人間関係もぜんぜん違っていったなあ、キャンプに参加して良かったなあと思っています。

学科内でも初めて顔を合わせた人がいて、最初は正直戸惑いしましたが、いろいろな企画の中で新たな発見もありました。バースデー・チェーンでは、まさか自分と同じ誕生日の人が二人もいるなんて驚いたし、ゼミ対抗ではいつの間にか陣を組んで、団結していてそれだけで楽しかったです。河原で投げ石で競争したり、中・高の頃の話語り合ったり、自然を見たり、とても充実したキャンプでした。これを機に友達も増えて、さらに大学生活が楽しめそうです。フレッシュマンキャンプばんざい!!



写真3 全体集合写真(2019年)



Freshman seminar!

タイムテーブル

時間	場所	活動	内容	備考
12:00	411	受付	出席確認 自己紹介 book 配布	くじ引き①
12:15	411	開会式	主任の先生からのお言葉 フレからの言葉	
12:40	移動			
13:00	香雪記念館 2階	昼食 自己紹介	お弁当・お茶配布	
13:40	香雪記念館 2階	デザート	カットフルーツ ペコちゃんのほっぺ	くじ引き②
14:20	3館前	写真撮影		
14:40	移動			
15:00	体育館	レクリエーション	ジェスチャー伝言ゲーム5 フラフープリレー3 ドッチビー2 二択ゲーム	
16:40	体育館	表彰		
17:00 仮	体育館	閉会式	担任の先生からのお言葉 フレからの言葉	
未定	体育館	解散	アンケートの回収 参加賞品配布	
未定	体育館		フレ反省会、片付け	

※トラブルなどにより、時間等が変更する場合がございます。

フレッシュマン・セミナー(2019年)タイムテーブル

**第二回(二〇〇六年)
フレッシュマン・キャンプ・リーダー二年生
(第一回フレッシュマン・キャンプ一年生)から
新入生へのメッセージ**

入学してまだ大学生活に慣れず、不安をいっぱいのみんな! このフレッシュマンキャンプで寝食を共にし、大いに語り合い、体を動かし、友達との仲を深めましょう!! 仲の良い友達・先輩・先生が出来ることで、この大学生活の四年間がまったく違うものになるはず!! 一泊二日みんなを楽しもう!!



写真1 投げ石で競争した河原にて



写真2 自己紹介



写真5 昼食・自己紹介



写真4 開会式



写真7 ドッチビー



写真6 フラフープリレー

2. 第十五回(二〇一九年)フレッシュマン・セミナー

今年度の春も、入学してきた新入生を迎えて、四月二十七日(土)にフレッシュマン・セミナーが行われました(写真3)。

当日は、開会式に始まり、フレッシュマン・リーダーから新入生に向けて言葉が贈られました(写真4)。そして、昼食を食べながら、互いに自己紹介を行いました(写真5)。新入生からは、「ご飯やお菓子もおいしかったし、色んな先生方とお話できてよかったです。楽しかったです」「話を盛り上げるための工夫が多くてとても助かった」「専攻の先輩と直接話すことができた貴重な時間でした」などの感想が終了後のアンケートからみられました。体育館でのレクリエーション(写真6・写真7)では、「久々に体を動かして楽しかったです」などのように、充実した時間を過ごしていたことがアンケートの回答から伝わってきました。また、体育館での二択ゲームでは、教職員に関するクイズがリーダーから新入生に出されました。クイズを作成するため、フレッシュマン・セミナー実施に先立って、リーダーが研究室などを訪れ、教職員に関するエピソードを収集する姿がみられました。このようなリーダーの地道な様子から、「私たち一年生のために忙しいなか企画してくださって、本当にありがとうございます!」と嬉しかったそうです!!「最初は少しめんどくさいなと思っていましたが、先輩方がたくさん準備をしてくれたのが伝わり、また友達がたくさんできたのですごく楽しかったです!」と楽しかったです!来年も参加したいと思いました」など、新入生は様々なことを感じたようです。

■ 『ダンボールランド』
〜子どものための遊び場づくり〜

本学生活文化学科 教授 松田 純子

生活文化学科では、三年次から研究室毎の「ゼミナール」が始まります。私が担当する保育学研究室（松田ゼミ）に学ぶ学生たちは、その多くが卒業後には保育所や幼稚園などの保育現場で働きたいと考えている保育者志望の学生たちです。

本稿では、保育学研究室が毎年本学の大学祭において取り組んでいる「子どもの遊び場プロジェクト」を紹介すると同時に、今年度の活動について報告したいと思います。

一. 子どもの遊び場プロジェクト

実践女子大学日野キャンパスでは、毎年十一月に大学祭「常磐祭（ときわさい）」が行われます。今年度も十一月九日（土）・十日（日）に開催されました。その常磐祭で、子どもたちのための遊び場を企画・運営するというのが、保育学研究室の慣習です。そして、この「子どもの遊び場プロジェクト」を担当するのが三年のゼミ生たちです。これまで十五年（十五回）に亘って実施してきましたが、一貫したコンセプトは、「どの子どもも楽しく思い切り遊べる場をつくらう」というものです。

現代では、都市部では特に、生活環境の変化などの影響により、子どもも大人も、日常生活の中で身体を思い切り動かす機会が減り、スマホやパソコンの画面に見入るような時間が増えてい

るように感じます。子どもは本来アクティブな存在です。広い空間と自由な時間があれば、だれに教わることもなく、純粹に楽しさを求めて遊びます。幼い子どももほど、五感を使った様々な体験が楽しく、それを通して健全な成長・発達も促されるのです。

遊び場プロジェクトの場所は、ここ数年は晴天であれば、大学のグラウンドにある傾斜を活用することになっています。広い空間を使つてのびのびと身体を動かす遊びをメインにしたいと考えているからです。傾斜を使うのは、そこに大きなダンボールのすべり台をつくるためです。以前は、小体育館を会場として、身体を動かすことを楽しくする遊具や用具（なわとびの縄や大小のボール、フラフープ、でんぐり返りができるマットなど）を使っていました。今はシンプルにダンボールだけを使います。そして、広々とした傾斜の空間とダンボールと学生たち自身が、遊びのパートナーであり、遊びを生み出す環境でもあります。

このように、子どもを取り巻く現代の社会や子どもの育ちの状況も念頭に置きながら、「子どもの遊び場プロジェクト



大学グラウンド傾斜にて準備万端

ト」が、ゼミ生たちにとって、子どもの遊びの意義を考えるとともに、保育者としても大切な力である企画力や運営力、そしてまた臨機応変な判断力を培う機会となればよいと思っています。毎年、常磐祭前の一カ月半ほどの期間を企画や準備に充て、ゼミ生一丸となって取り組んでいます。嬉しいことに、例年二日間の開催で、一日あたり延べ人数で百名を超える子どもたちが遊び場によつてきてくれます。今年度も二日間とも、これ以上ないほどの快晴に恵まれ、『ダンボールランド』と銘打った遊び場は大盛況でした。

二. 子どもの遊び場で学生たちが得ること・求められること

常磐祭での子どもの遊び場は、保育現場とは異なります。あらかじめ入園を認めた子どもたちを預かり、保育するという公の責任を負う場ではありません。それは責任がないということではありませんが、学生からしてみれば、保育者（実習生）として評価を受ける場ではない分、少し気持ちが楽に、そして失敗をあまり気にせずにのびのびとふるまうことができる場であるようです。そのことが、遊びの「楽しさ」を子どもと共有しやすくしているかもしれません。

また、常磐祭には、不特定多数の人たちがやってきます。遊び場にも、親子連れや仲間同士（小学生）で、様々な子どもたちが来場します。乳児から小学校高学年まで、あるいは大人も含めて幅広い年齢層です。そのような色々な年齢の来場者を想定して、みんなが安心して楽しく遊べる場をつくるには、想像



すべり具合はどうだろう？

わる小学生が同じ場所で遊ぶとしたらどうでしょう。幼い子どもたちが安全に安心して遊べる空間を確保しながら、一方で小学生がダイナミックに安全に動ける空間を用意する必要があります。また、子どもたちが遊んでいる間、保護者はどのように過ごすでしょうか。子どもと一緒に遊ぶ保護者もいるかもしれませんが、見守っている保護者もいるかもしれません。後者の場合は、保護者の居場所も必要になります。

三. 『ダンボールランド』の学び

〈場のメッセージ〉

遊び場プロジェクトの企画と運営の一つのポイントは、空間

力と創造力が不可欠です。また、初対面の相手であっても、すぐに親しく対話ややりとりができるようなコミュニケーションの力も必要です。そして、小さい子も大きい子も、女の子も男の子も、だれもが楽しく遊べるようにするために、様々な配慮が必要となります。たとえば、よちよち歩きの幼い子どもと元気に走りま

の構成ですが、グラウンドの傾斜を遊び場とした時から、課題は一気に容易になりました。広い傾斜とそこに広げられたダンボールから伝わるメッセージは明らかです。やって来る子どもたちは、遊び始める前から、ダンボールのすべり台だという明確なイメージを持っているようです。ゼミ生が説明をしなくても、ここではこんなことができるんだよというメッセージが伝わっているのです。もちろん遊び方は子どもたちの自由ですが、とりかかりのアイデアが示されるとスムーズに遊びに入ることができず。

〈移り変わる場〉

時間の流れによって、子どもたちの顔ぶれも変わります。子どもの人数や年齢、活動の様子などを見ながら、ダンボールすべり台の位置や使い方を柔軟に変えていくことも必要です。傷んだ箇所は補修もしなければなりません。もちろん、個々の子どもの安全には細心の注意を払いながら、どの子どもも楽しく遊べるよう見守ったり一緒にすべったり、個々の子どもに合わせた必要な援助も行います。また、ゼミ生同士で声をかけ合い、注意を促したり、交替で休憩を取ったりと、お互いの連携や協力も重要です。

〈への返playの意味〉

ダンボールすべり台で遊ぶ子どもたちの姿を見て、まず感銘を受けるのが、「くり返し」です。子どもたちは、傾斜を登ってはすべり降り、登ってはすべり降りを飽くことなくくり返します。何がそんなに面白いのでしょうか。しかし、よく見ていると色々

は少し違和感がありました。大学祭は、学生たちのお祭りです。そこに子どもたちに来てもらうというのです。まずは常磐祭に子どもたちが来てくれるかどうかの心配がありました。地域の子どもたちやその関係者への周知がなされなければ、子どもたちが大学に来ることはありません。子どもたちが来てくれなければ、せっかくよい企画を考えても意味がありません。「子ども遊び場プロジェクト」は、当日の遊び場の企画・運営だけではなく、事前の広報活動も含むことになりました。常磐祭前に、地元日野市の保育所や幼稚園、児童館に子ども遊び場の案内状を送ることにしました。案内状には、遊び場だけではなく、他のゼミの企画などを知らせるチラシも同封します。近隣の保育所や幼稚園、児童館には、直接案内状を届けることもありました。

また、プロジェクトがスタートした当時は、地域の保育関係者や子どもたち、そしてその保護者の方々にはまだ「実践女子大学の保育者養成課程」の存在は知られていませんでした。それから十五年経って、実習やボランティア活動、地域活動への学生の参加も増える中で、「子ども遊び場プロジェクト」も保育学研究室の学びの一環として継続し、地元日野市でも徐々に知っていただけになりました。今では、毎年の行事として、地域の皆さんに認知され、リピーターの子どもたちもいるほどです。保護者の方々も、「近くに住んでいてもなかなか大学の中に入ることはないのですが、大学祭に子どもと一緒に来て、楽しむことができるとてもよかったです」というような感

なことに気づかされます。子どもたちは、ずっと同じことをくり返しているわけではありません。くり返しの中に変化があり、その子なりの工夫もあるのです。このようなくり返しの中でコツを掴み、動きが滑らかなになり、バランスよくすべることができるようになったり、より難しいすべり方に挑戦したりするような姿も見られます。そのような時の子どもの表情は真剣であり、生き生きしているように感じます。そして、スリルを味わったり難しい技を成功させたりした時の笑顔は実に爽やかです。

〈ダンボールという素材〉

ダンボールは身近な素材ですが、いざすべり台として使用してみると、些細なことながら、色々なことが分かってきます。まずダンボールと言っても様々な種類があります。厚くて硬いもの、薄くて柔らかいもの、表面がコーティングされているもの、などです。一体どのタイプがすべりやすいのだろうか。すべり台の幅はどれくらいにすればよいのだろうか。ダンボールを繋ぐガムテープは剥がれないように裏側にして、表側のダンボールの繋ぎ目は少し重ねておく。その重ねる方向にも注意が必要。またグラウンドの傾斜は草が生えているので、朝は露で濡れています。その上に置いたダンボールが湿ってしまうとすべりが悪くなってしまいます。このように、実際にやってみて気づくこと、分かることが多くありました。

四．地域の子どもたちのための行事

大学祭で子ども遊び場を企画するということには、当初

想を伝えてくださいます。また学生たちが子どもたちと楽しそうに遊ぶ姿には、「さすが幼児保育専攻の学生さんたちですね」とコメントをいただくなど、地域へのよいアピールの場にもなっています。広範囲から大学に通ってきている学生たちですが「地域の中の大学」を感じるよい機会でもあるようです。

これからも学生たちの力を育む豊かな学びの機会として、そして、ささやかながらも、地域において子どもたちが思い切り身体を動かして遊ぶことのできる場の創出と、その重要性を保護者にも伝える啓発の機会として、「子ども遊び場プロジェクト」を継続していきたいと考えています。



快晴に恵まれ、途切れることなく大盛況！

① 創立120周年イベント

■ 「実践女子学園フェスティバル(J-フェス)」参加 …… 30

田中 正浩 本学生活文化学科 教授

島崎 あかね 本学生活文化学科 准教授

② 実践女子学園 創立120周年記念 公開講座

■ 実践女子大学 生活科学部「これからの暮らし」の創造
実践女子大学における家政学の創生と

これからの生活科学 …… 32

成長を楽しみたい子育て

～子ども、親、保育者が共に育つ～ …… 33

近藤 幹生 白梅学園大学・白梅学園短期大学 学長

③ 産学連携

■ 子ども向け玩具「チアフルうさちゃん」商品開発に協力
…………… 37

松田 純子 本学生活文化学科 教授

越山 沙千子 本学生活文化学科 助教

■創立百二十周年イベント

「実践女子学園フェスティバル（J・フェス）」参加

本学生活文化学科 教授 田中 正浩
准教授 島崎あかね

昨年五月十一日、十二日と本学渋谷キャンパスで開催されたJ・フェスに、生活文化学科は「生文カフェ&けん玉体験」日野と繋がる「日野で学ぶ」をテーマに出展しました。両日共に多くの方が立ち寄ってくださり、楽しんでいただきました。

カフェ店頭では、日頃、授業やボランティアでお世話になっている地元・日野市の障害者就労支援施設「わく・わく」によるクッキーやパウンドケーキを主に販売しました。加えて、東ティモール産のフェアトレードコーヒーも用意し、その場で淹れたてを味わっていただきました。いずれも売れ行きはまずまずで、何よりも「美味しいです」という言葉が嬉しくもありました。店内では、卒業されて何十年という方々がコーヒー片手にお話をされている中に加えていただき、学園に纏わる思い出話のお裾分けをしてもらいました。

また、障害のあるお子さんの発達支援プログラムとして、カルピスづくりを通じたコミュニケーションの促進方法について開発研究を行ってきた長崎ゼミでは、アサヒグループホールディングスからカルピスの提供を受け、販売しました。お子さんが自身でカルピスに慎重に水をたしていく姿がとてかわいらしくありました。カルピスの売り上げは僅かばかりではありませんが、全額を福祉施設に寄付しました。

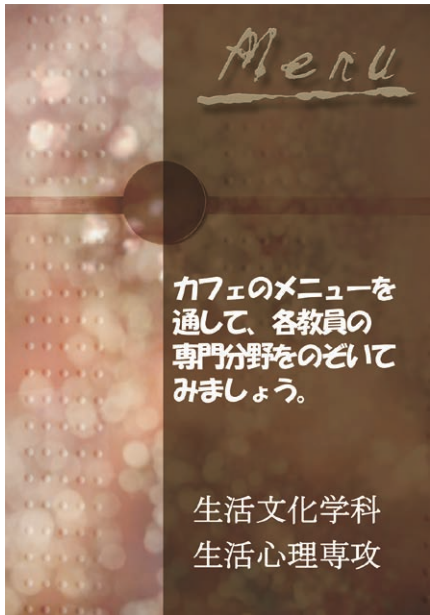
店内に展示し、また、お客さまにお配りしたのは、ユニーク

なメニューとランチョンマットでした。メニューは、生活心理専攻の教員が各自の専門分野をもとに作成し、ランチョンマットは、「広がる！けん玉からの学び」と題し、けん玉でどのような遊びや学びが可能かを、幼児保育専攻の教員が各自の専門性から提案し、作成したものでした。

学科ブースの一角では、「けん玉チャレンジ」と題して、何人の方が大皿に球をのせることができるか挑戦していただきました。はじめは「けん玉なんてできない」と敬遠していた中高生も、「学童でやっていたから得意！」という小学生、初めてけん玉にチャレンジしてくれた大学生など、幅広い年齢の多くの方が挑戦してくれました。また、保護者や卒業生の皆さん、教職員の皆さんも懐かしそうにけん玉を手にとって参加してくれました。中でも、初めてけん玉を手にした小学生の男の子は、コッスを掴むまで黙々と一時間近くチャレンジし続け、最後には何回も成功することができました。成功した時の男の子の達成感に溢れた満面の笑みは、周りで見守っていたお母様を始め、私たちの心を温かくしてくれた瞬間でした。

二日間で約四百五十人の方がチャレンジしてくださり、「けん玉」を通して伝承遊びの楽しさと共に、多世代交流・異年齢交流の重要性を改めて実感することができました。

十二日にはオープンキャンパスも同時に開催され、学科説明、模擬授業を受けた参加者が、案内を受け、けん玉体験コーナーや生文カフェに足を運んでくれました。在学生とコーヒーを飲みながら歓談し、学科のことを知っていただける絶好の機会になっていったようでした。



カフェのメニューを通して、各教員の専門分野をのぞいてみましょう。

生活文化学科
生活心理専攻

■ 実践女子学園 創立百二十周年記念 公開講座

実践女子大学 生活科学部

「これからの暮らし」の創造

実践女子大学における家政学の創生と

これからの生活科学

日時：二〇一九年十一月二日(土)

十三時二十分～十五時四十分

場所：実践女子大学 日野キャンパス

本館一階 キャンパススクエア



実践女子学園の創立百二十周年を記念し、さる十一月二日に生活科学部の公開講座が開かれました。ここでは、生活科学に関連する衣・食・住・保育の四分野の先生方をお招きし、お話をいただきました。

【衣分野】実践女子大学教授・生活科学部長 実践女子学園理事 牛腸ヒロミ先生

「これまでの衣生活とこれからの衣生活
～被服材料と染色・洗浄を中心に～」

【食分野】実践女子大学 元教授（一社）和食文化国民会議理事（二社）日本家政学会食文化研究部会副部長 大久保洋子先生

「日本人のくらしと食文化
～和食文化の魅力と次世代への継承～」

【住分野】東京理科大学 准教授 オンデザインパートナーズ代表 西田司先生

「これからの暮らしの創造」

【保育分野】白梅学園大学・白梅学園短期大学 学長 近藤幹生先生

「成長を楽しみたい子育て
～子ども、親、保育者が共に育つ～」

ここでは、保育分野の近藤幹生先生の講義内容をお伝えしたいと思います。

＜近藤幹生先生の講義内容＞

「成長を楽しみたい子育て」

～子ども、親、保育者が共に育つ～

「一人で悩まない 子育ての輪を」

子育ての輪を作っていこう。

●子育てはどの世代でも皆抱えている課題である。ゆえに、一人で抱え込まずに周りの方々の力を借り、全体的な社会の中で様々な工夫をしながら子育ての輪を広げていくことが重要である。最近では、保育所・幼稚園・認定こども園をはじめとする保育施設の取り組みや市町村の諸事業など、子育て支援の体制が整備されてきている。

例) こんには赤ちゃん事業

…子どもが生まれると、約四カ月の間に自治体の保健師が様子を見に訪ねる事業のこと。

↓核家族社会が進む中で、「こんには赤ちゃん事業」やそれ以上に手厚い形の子育て支援を広く進めていく必要がある。

●子育ては誰でも不安であるため、支え合いこそが大切だ。様々な施設やファミリーサポートなど、いろいろな動きがある中で、協調し支え合うことの大切さを伝えていくべきなのではないか。



【成長・発達とはジグザグの道のり】

人間の成長・発達は本来、ジグザグの道のりである。

●成長の節を大まかに押さえていくべきだ。今の親はスーパーや病院で子どもが泣くと困ってしまい、周囲の大人も冷たい目をつける。泣くことも著しい成長発達の証であるから、大勢の大人たちは以下の節目の視点を共有してほしい。

○歳半 … 目と目を見ながら次第に動き回る。

一歳～二歳…歩きはじめ、転び、また歩く。これは大事な発展であり、感動的な行為といえる。言葉を獲得し、生活習慣の自立に向けての成長も見られる。そのため、「自分でする」「いやだ」という自我の芽生えが見られる。

二歳～三歳…自分への自信が出てくる。仲間と共に成長するようになる。しかしぶつかり合いもあるため、かみつきも見られる。かみつきという行為はまだ言葉が十分に発達していないために起こる。ぶつかり合いやけんかをし合ってお互いに成長し合う必要がある。

四歳～五歳…集団の生活における遊びの中で育つ。二、三歳児より激しいけんかも現れる。

けんかについて、小学校以上の道徳で「けんかそのものがない」と教わることもあり、就学前の子どもたちにもそういう傾向がある。しかし、けんかをするとことは、他人を批判する力があるということであり、お互いがけんかをし合うことで成長していく。

しても良いことと悪いことを上からおしつけてしまうのは良くない。子ども時代で一番大切ともいえるけんかを通しての学びは重視され続けるべきである。

まな発見、驚きもある。

●子どものゆつくりとした時間を、親も大切にすることが重要である。子どもと関わりながら、子どもの時間を考えるべきなのではないか。

↓個人の方だけでは難しいが、ようやく社会全体が乳幼児期の保育・子育てに目を向けるようになってきた。

【子どもには生きる権利・育つ権利がある】

●児童の権利に関する条約（子どもの権利）が国連で決まったのは一九八九年。日本では一九九四年に批准された。しかし、児童福祉法が改正され児童の権利に関する条件の精神が第一条に盛り込まれたのは二〇一六年の六月である。

↓日本の保育園・幼稚園の子どもの保育が、子どもの権利に照らしてどうなのかという検証は、むしろこれからの課題なのだ。

●四つの基本的権利

①生きる権利 ②育つ権利 ③守られる権利 ④参加する権利

しかし、保育園の先生によって連れて行かれる散歩で子どもが被害に遭ってしまうのが、今の日本社会である。待機児童対策のなかでやむを得ないこととはいえ、線路の下に小規模保育園が設置されることが増えてしまっている。子どもたちのための庭がない状況で思い切り遊んだり声を出したりできるのだろうか。この現状は本来的ではない。

このように、自分でいろいろな力を獲得していく生活習慣の自立は一直線に進んでいくわけではない。それを、今の余裕のない社会の中でもつと伝えていく必要がある。

【子ども・親・保育者が共に育つ】

●子どもの「何気ない言葉」に耳を傾けると良い。子どもたちの言葉に学ぶこともある。こういった子どもの眩きにきちんと側で聞いてくれる大人の存在はとても大切である。

例（二歳児の言葉）

「かあさん はっぱのなか さむい」（夏に）

↓子どもなりになにか涼しさを感じた。二歳でこういう感覚を獲得していく。

祖父（近藤先生）と孫（五歳児）

祖父「今日は雲がすくくて外が見えないね」

孫「あれは もや というの」

祖父「今日は天気予報で雪が降ると言っていたよねえ。あつ、雨みたい」

孫「おじいちゃん あれ みぞれというの」

↓子どもは我々が思っているよりも言葉を知っている。子どもの成長速度をもう少ししっかりと考えるべきだ。

【子どもと共に過ごす】

●様々な子どもの記録をしっかり保存していく（言葉を記録してみる、デジカメに撮ってみる）ことが重要である。さまざま

●子どもの権利条約は、〇歳児から一八歳までが対象であると定義される。まだ自分の要求を表現できない子どもの泣き声や表情から、その子が何を願っているのかをきちんと把握して、社会に発信していくことが保育園・幼稚園の先生の非常に大切な仕事である。

●子どもを泣かせられないという日常

権利条約を定めてもなお、こういった状況であるという問題は改めて考えるべきである。

●第十二条 意見表明権利

子どもには意見表明権利がある。

↓本当に言いたいことは音声として聞こえてくる言葉の裏側にあるものだったりする。障がいのある子どもや外国籍の子どもが伝えたいことなども含め、大人はもっと言葉の裏側にあるものをしっかりと聞くべきであるし、大事に考えていくべきだ。

例「園長先生のばか！」と言いつける子ども

↓ずっと言われるから困っていたが、しばらくしてからその後「ブランコ揺すって」と言っていたことに気付いた。

本来、園長先生に伝えたかったのはブランコを揺すってほしいという願望であった。

【大人の価値観をおしつけず成長を楽しみたい】

● 大人が親視線で、子どもに対してこうあってほしいと願うことは当たり前。しかし子どもは大人の所有物ではない。わが子にこう育ってほしいと考えるのは自由だが、実際どう生きるかは子ども自身にしか決める権限がない。

● 子どもは親のイメージとは全く違う育ち方をするということをもつと大人社会は明らかに考えるべきだ。

● 子どもには、その子にしかない持ち味がある。

● 子どもに代わって生きることはできないが、子ども側に立つてあげることや、応援してあげることができる。

【子育て・保育…不安や戸惑いはある】

● 子育てを経て感じたこと

成長・発達は、ジグザグした道のりであり、子どもがどう育つかは辛抱強く待つしかない。諦めに似た気持ちになる。子どもの時間を大切にすることが必要である。

● 子どもを応援することはできるし、不可欠な親の責任、社会の責任でもある。

しかし、その子に代わって生きることはできるのだろうか。今一度考えてみるべきであろう。

【おわりに】

● 今、AI時代、少子高齢化、多様性社会において様々な問

題がある。しかし、こういった課題がある保育や子育ての現実を大人がしっかり見ていくことが大切である。保育園や幼稚園に来ている子どもの家庭環境などを、視野を広げながら良く見ていきたい。

● 子どもの向こう側に、多種の生活・社会・文化の問題を発見することができる。

(記録 幼児保育専攻一年 尾形 珠実)



■産学連携 子ども向け玩具「チアフルうさちゃん」商品開発に協力

本学生活文化学科 教授 松田 純子
助教 越山沙千子

本学科の松田と越山は、イワヤ株式会社より二〇一九年八月に発売された「おやすみなさいのおともだち チアフルうさちゃん」の開発に関わらせていただきました。

イワヤ株式会社(東京都足立区)は、一九三三(大正二二)年に創業し、動くおもちゃ(電動玩具)を中心に開発、販売をする老舗おもちゃメーカーです。安心・安全で、良質なおもちゃを製作しています。代表的なおもちゃには、丸太の切り株に座ったくまさんが、太鼓をたたいて笛を吹く「くまのトンピー」があります。

二〇一七年には、「ちーちゃんはいくしさん? チアフルくまちゃん」が発売されました。くまちゃんは、子どもの成長だけではなく、家族もほっこりできるお手伝いをする成長応援トイの第一弾として開発されました。その第二弾として商品化されたのが「チアフルうさちゃん」です。開発者の水野久美子氏は、自身の子育てで寝かしつけの大変さ、難しさを感じた経験から子どもの寝る前の時間に着目し、家族のおやすみタイムを穏やかに楽しく過ごせるようにしたいという思いで、うさちゃんを製作しています。松田と越山も水野氏の思いに共感し、開発に協力させていただきました。



「チアフルうさちゃん」は一歳半以上の子どもを対象に作られています。手足のスイッチを押したり、おなかをなでたりすると、うさちゃんが歌ったり、お話してくれます(詳細は次ページの表参照)。うさちゃんの声は、動画サイトで人気の姉妹のママクリエイター「東京ハイジ」によるもので、《はみがきのうた》などの「東京ハイジ」のオリジナル曲も収録されています。また、背中に入っている電池ボックスのスイッチで、「ひるモード」と「よるモード」の切り替えができるのも大きな特徴です。「ひるモード」では、うさちゃんが口をパクパク動かして歌ったり語ったりします。「一方」よるモード」では、静かな音で聞くことができ、同じ歌やお話が五回連続流れることで、スムーズに入眠できる

よう工夫されています。ふかふかしたなめらかな触り心地で、子どもたちに可愛がってもらえるように、耳の長さや表情などの細かい所まで、こだわって作られています。

保育学が専門の松田は、睡眠が乳幼児期に身につけたい大事な生活習慣であることから、就寝前の時間を家族でほっと過ごすことができる時間になるよう、うさちゃん役立ってくれると良いのではないかと期待しています。大人は、子どもにおもちゃを与えると、おもちゃに任せきりになってしまうこともあるかもしれません。そうではなく、うさちゃんを介して子どもと大人がかかわりあうことで、子どもは「大好きな人」が寄り添っ

表1：スイッチごとのうた・お話一覧

右手	東京ハイジのこもりうた はみがきのうた ポウロのうた ありがとうの唄 ボタボンのこもりうた DREAMS DREAMS ~IN SILENT MEMORY ©SEGA	左手	こころよいこもりうた ゆりかごのうた シューベルトのこもりうた きらきらぼし 江戸のこもりうた ラ・ラ・ルー ことりのうた おはながわらった
右足	こどもが大好きにほんのお話 一寸法師 へっこきよめさま ネズミのよめいり まんじゅうこわい いのししと月	左足	こどもが大好きせかいのお話 ライオンとねずみ 金のオノ 銀のオノ こびとのくつや てぶくる にげだしたパンケーキ

てくれるうれしさや安心感、自分に対する愛情をしっかりと感じる事ができる時間になると考えられます。また、大好きな歌やお話を聞きながら、穏やかな気持ちで眠れるよう、同じ歌やお話を連続再生してはどうかと提案したところ、「よるモード」の機能として取り入れていただきました。

音楽教育が専門の越山からは「よるモード」での音量について、電気を消し、様々な情報から離れた静かな環境で聞こえてくる音量が良いのではないかと提案させていただきました。乳幼児の聴覚は発達途上で、大人とは異なります。また、日常生活に様々な音が氾濫していることから、一日の終わりを静かに、穏やかに過ごすことのできる環境づくりが大切です。声質は、赤ちゃんに語りかける時のようなやわらかく、心地よいものに、音質もやわらかく、聞き取りやすいシンプルなものにすると良いとお伝えしました。これらの要素を取り入れて再録音してくださった歌もあります。かたく、芯のある音よりも、ほっこりと過ごせるのではないかと思います。また、うさちゃんの歌には、家族と一緒に楽しめる歌だけではなく、子どもも大人も自然な発声で歌えるものが多いのも魅力のひとつです。

今回、おもちゃの開発に関わらせていただくという貴重な機会をいただき、様々なことを学ばせていただきました。イワヤ株式会社のおもちゃ作りへの情熱、商品に込められた思いを身近に感じ、改めておもちゃを大切にしなければいけないと感じています。この場をお借りして、イワヤ株式会社の皆様、研究推進室の皆様には厚く御礼を申し上げます。

IV

学科報告

①授業紹介

- 知覚・認知心理学 a・b 40

作田 由依子 本学生活文化学科 専任講師

- 音楽 42

越山 沙千子 本学生活文化学科 助教

②研究活動紹介

- 研究活動紹介 44

細江 容子 本学生活文化学科 教授

- 研究活動の紹介 48

島崎 あかね 本学生活文化学科 准教授

③就職活動体験記

- 幼児保育専攻の就活体験 50

大澤 朋子 本学生活文化学科 専任講師

- 特別支援学校で家庭科を教える：大学生生活と変わったこと 54

黒澤 美月 東京都立特別支援学校教諭
(本学生活文化学科生活心理専攻 2018年度卒業生)

④卒論紹介

全国保育士養成協議会関東ブロック協議会
第33回学生研究発表会 (2019年2月22日 於：大妻女子大学)

- 一型糖尿病(小児糖尿病)児の保育における配慮事項... 56

伊東 実咲 本学生活文化学科 幼児保育専攻 4年

- 造形指導を行う専任講師の専門性
—— 子ども主体の活動の実現に向けて —— 59

水野 葉月 本学生活文化学科 幼児保育専攻 4年

⑤その他

- 東日本大震災岩手県宮古市支援プロジェクトについて ... 62

松田 純子 本学生活文化学科 教授

島崎 あかね 本学生活文化学科 准教授

■知覚・認知心理学 a・b

本学生活文化学科 専任講師 作田 由衣子

私が担当している認知心理学の授業は、「これ、本当に心理学なの？」と思われがちです。毎回、授業の最後に質問や感想を書いてもらうのですが、テーマによっては、「高校の生物の授業みたいだった」「これがどう心理学と結びつくのかわからない」というコメントがきます。

まずは初回のガイダンスなどで「心理学と聞いてカウンセリングや対人関係などのテーマをイメージする方が多いかもしれませんが、認知心理学では、人間を情報処理の装置ととらえて、人が世界をどのように認識しているかを考えます」という説明をします。認知心理学の研究対象は非常に幅広く、たとえば人が色や形、動きなどの視覚的な要素をどのように認識しているか、感情情報は脳内でのように処理されているか、身体感覚と認知の関係、注意、感性、顔認知、記憶、言語、問題解決、意思決定…など、多岐にわたります。人が世界をどのように認識しているかを考える上で、まずは目や耳などから入ってきた情報がどのように処理されるのかを知ることから始めます。そのため、授業ではまず目や耳などの感覚の話から始めて、徐々に複雑な情報処理の話に移行するパターンが多いです。

一年生後期の知覚・認知心理学 a の授業の前半では、主に視覚的な情報処理の話をするのですが、眼球など感覚器官のしくみの説明から始めるので、どうしても生物学的な話が多くなり記憶がきちんと機能していなければ、昨日の私と今日の私が連続した一人の人間であることが急に不確かなものになってしまいます。また、認知心理学全体を通して繰り返し出てくる話になりますが、人の知覚や認知というのはあてにならないものです。記憶も、間違ったことを教えられると簡単に歪められてしまうなど、かなり曖昧な部分があります。人の認知や記憶の曖昧さ・不正確さについて知っておくことは、周りをたくさんの人に囲まれた社会の中で生きていく上ではとても大事なことではないでしょうか。たとえば与えられた情報で認知が歪められてしまった場合、本人はうそをついているつもりがなくても、結果的に間違ったことを言ってしまうことが起きます。認知の曖昧さを知っていれば、そういう人に対してむやみに怒ったり混乱したりすることを避けられるかもしれません。

記憶の話の後は、注意、言語、概念…と続きます。それぞれの内容は少しずつリンクしているので、前の回の話を思い出しながら授業を受けてもらえればと思います。その後の確率の判断や意思決定あたりは、心理学というよりも行動経済学などでよく扱われるテーマかもしれません。高校のときに、数学の授業で確率について勉強すると思います。そのときに、苦手だと思っただけでも多いかもしれません。色々な課題を設定して、確率を推定してもらうと、多くの方が揃って間違えてしまうような状況(課題)があることが分かっています。確率の判断は難しく、直感的な判断とは食い違うこともあります。このあたりのことでも覚えておくと、その後の人生の様々な場面で役に立つかもしれ

ます。そこで学生は「なんだか様子がおかしいぞ」と思い始めます。まさか、心理学の授業を受けに来て、網膜の構造や、耳の解剖学的な話などを聞くと、思わなかったのではないのでしょうか。

授業の中盤に差し掛かると、感覚から知覚、認知へ、徐々に高次の(より複雑な)処理の話に移ってきます。錯視や感性認知の話は、学生にも親しみやすく、少し一息つけるような楽しい回になっているかと思えます。企業の広告や建物や椅子などに錯視が使われている例を紹介し、目の錯覚が起こることによってどのような効果が生まれるのか、なぜ目の錯覚が起こるのかなどについてお話しします。合間に脳内での処理やパターン認知の話を含みますが、この頃になると学生も慣れてきて、質問内容も少し高度なものになってくるようです。

授業の後半では、顔認知や発達、知覚の障害など、少し応用的な話を紹介します。物を見たり音を聞いたりということは普段あまりにも普通に行われすぎていて、意識することはほとんどないと思いますが、実は様々な要素が絡んだ処理が行われていて、そのどれか一つが欠けた場合には知覚の障害が起こってしまうこともあります。問題なくものが見えるとか、音が聞こえるといったことはとても幸せなことなのです。

二年生前期には知覚・認知心理学 b の授業があります。知覚・認知心理学 a と b はどちらから履修してもよいことになっていますが、bの方がより高次の処理に関する内容となります。まずは認知の基本的な特性から始めて、記憶について三回に分けて講義を行います。記憶というのは本当に不思議なものです。最後に、潜在認知、認知や思考の障害、心の文化差の話をしていきます。文化差については、様々な所で「考え方」などのレベルではなく「知覚」のレベルで文化差があることがわかっています。つまり、情報処理のかなり早い時点で、文化による影響が見られるということです。これは困ったことになりました。心理学の教科書に載っていること(特に古典的な研究)の多くは、アメリカやヨーロッパなどで行われた研究に基づいています。勿論アジア圏などの研究もありますが、相対的に見るとまだ少ないです。そうすると、有名な心理学の現象や理論でも、その研究が行われた国の人にはしか通用しないのではないかと、日本人には当てはまらないのではないかと、といった疑問がわいてきます。これは、研究成果がどこまで一般化できるかというとても大きな問題となります。授業の最後の回でこのような話を聞いたら、それまで一年かけて学んできたすべての話をひっくり返されてしまうような気持ちになるかもしれません。大事なものは、「知ること」、知った上で「相対化すること」だと思います。大学の授業と高校までの授業の一番大きな違いは、授業で出てくる話がすべて絶対的に正しいものではない(かもしれない)という点ではないでしょうか。これからどんどん新しい研究が発表されて、教科書の内容が覆されていく可能性があります。学生の皆さんには、ぜひ授業で出てきた内容について批判的に考えてみたり、調べてみたりする癖をつけてもらえればと思います。

れません。

■音楽

本学生活文化学科 助教 越山 沙千子

幼児保育専攻の学生は、二年次に「音楽」を履修します。現在は幼稚園教諭・小学校教諭の免許を取得するための科目ですが、二〇一六(平成二八)年の教育職員免許法の改正により、今後カリキュラム及び講義内容が変更されます。幼児教育に関する内容は、音楽、身体、造形の三領域を網羅する「子どもと表現」という科目に変わり、「音楽」という科目は、小学校の音楽科教育に関する内容に特化するようになります。

今年度の授業では、①弾き歌い発表、②基礎的な音楽理論、③音・音楽にかかわる表現活動を行っています。

①の弾き歌い発表では、毎回二人〜三人の学生が自ら選んだ歌を弾き歌いし、それに合わせて他の学生が歌います。そうすることで、歌いやすい、歌いたくなるピアノがどのようなのかを理解します。弾き歌いした学生には、演奏上の「こだわりポイント」も話してもらいます。作品の音楽的特徴からどのようなイメージをもつか、イメージが伝わるように歌い方や弾き方をどのように工夫したら良いかを共有します。弾き歌いはピアノを弾くことに必死になってしまったり、一緒に歌ってくれている人の歌を聴く余裕がなかったり、歌う活動そのものに満足してしまったりすることもあります。しかし、保育者・教育者の弾き歌いが子どもの表現力の育ちに影響を与えていることを真剣に考える必要があると思います。

は、「それいいねー」「おもしろいーやってみようー」「こうしたらどうかかな？」といった会話が聞こえてきました。子どものアイデアも同じように受け止め、活動や作品に取り入れることができる柔軟性を養いたいと考えています。

十月下旬の晴れた日には、校内の音探検をしました。身体の諸感覚を使い、普段意識して聴かないような身の回りの音に耳を傾けてみると、面白い発見があります。音探検では聴診器も使って様々な音を聴いてみました。水道の蛇口から聴こえる水の音(写真③)に興奮したり、木の幹をこすってみると、苔が生えているところでモサモサした音がしたり、鉄柱内で反響する音がきれいだったり、好奇心がくすぐられる活動となりました。その後、鉛筆やペンの種類、筆圧や色などを工夫し、音を図形や絵で表現する音地図を作製しました(図①)。

子どもと楽器のかかわりでは、楽器とは知らない乳幼児が楽



写真③蛇口に聴診器をあてるとどんな音がするでしょうか？



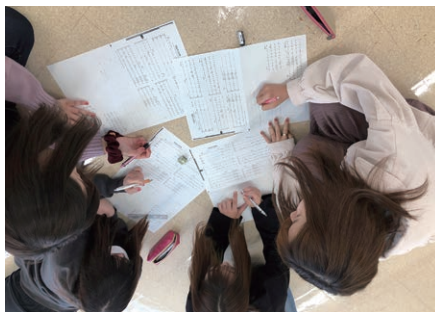
図①音地図

②の基礎的な音楽理論では、音階やコードネーム等を扱っていますが、学生が苦戦しながら課題に取り組む様子が見られました。授業では実例を挙げ、人の心を動かすポイントでどのような理論が見られ、活用されているのかを知ること、理論を少しでも身近に感じてもらえたらと思っています。また、いつどのようなときに役立つのかを知り、考え方と活用方法を意識して課題に取り組んでいます。

授業のメインとなる③音・音楽に関わる表現活動では、子どもの発達や表現する姿を意識しながら学生の表現力を磨いていけるよう、様々な活動を行いました。ボディパーカッションのグループ活動では、楽譜の一部にアドリブを取り入れ、発表しました(写真①②)。グループ内でアイデアを出し合い、試行錯誤しながら一つの作品を作り上げる過程が大切だと思います。活動で



写真①発表に向けて練習する様子



写真②アドリブ部分を考え中



写真④太鼓の上に星を乗せてたいてみました



写真⑤トーキングドラムで会話

器と出あい、どのような遊びをするのかを事例を通して考え、十分に探索をする大切さを学びます。音を見たり(写真④)、触ったりする体験を通して、聴くだけではない音の捉え方、感じ方を子どもと楽しめるようになってくれると良いと思います。

合奏では、既存の楽譜を用いず、イメージした音が出る楽器を選び、どのように音を出すのかを考えてもらいました。戸惑っている学生もいましたが、グループでアイデアを出し合い、ストーリーを考えたり、情景をイメージしたりしながら、様々な楽器を鳴らして試行錯誤していました(写真⑤)。

学生には、自分自身の表現の幅を広げられるように、今後も努力してほしいと思っています。同時に、事例や活動を通して、子どもの多様な感じ方、捉え方、表現する姿、そして表現を育てるとはどのようなことなのかを考え続けることが、大切だと思います。

■研究活動紹介

本学生生活文化学科 教授 細江 容子

科学研究費を取得し、現在実施している研究のテーマは「社会関係資本創出を想定したジェロントロジー教育を通じての新たな高齢者文化の創造」である。

本研究は、平成二十八年〜三十年度科学研究費助成事業基盤研究で行われた地域づくりを目指したジェロントロジー教育プログラム手法の開発に関する研究を基に、人生一〇〇年時代(Gratton, 2016)の共働、共生の地域づくりを志向したフォース・エイジ(the fourth age)の(Laslett 1989)のジェロントロジー教育プログラムの展開と、その教育を通じての人生一〇〇年時代の新たな高齢者文化の創造を目指すものである。人生一〇〇年時代と言われる今日、日本老年学会・日本老年医学会では、国などへ「高齢者」とする年齢を体力的な面などからも七十五歳以上に引き上げるべきだとする提言をまとめており(2017)、長寿化の中、高齢期の時期区分に対する引き上げを提示している。

Laslett (1986) は、人の誕生から死までの人生周期の一般的な区分を、「依存・社会化・未熟・教育の時代」であるファースト・エイジ (the first age)、「成熟・自立・生殖・稼ぎと貯蓄・家族と社会への責任の時代」であるセカンド・エイジ (the second age)、「達成 (personal achievement/fulfillment) の時代」であるサード・エイジ (the third age)、「依存・老衰・死の時代」であるフォース・エイジ (the fourth age) の四段階に区切っている(小田 2001)。

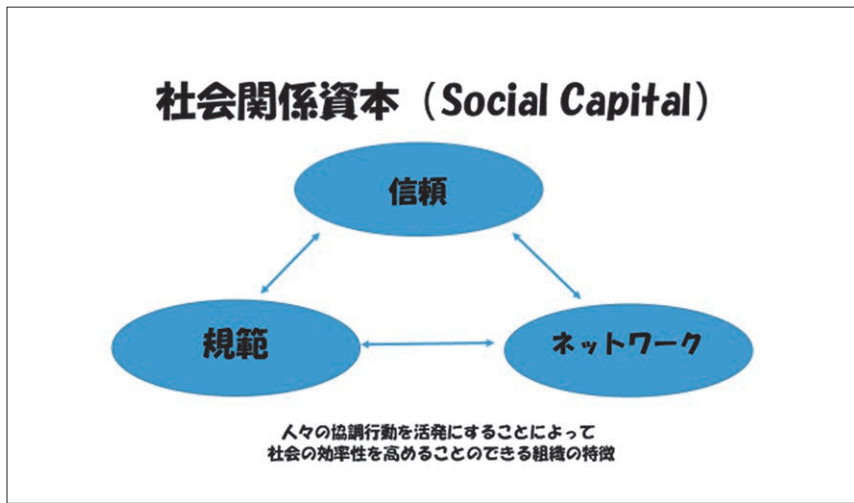
Laslettのこの段階区分では、六〇代であろうと九〇代であろうと「依存・老衰・死の時代」の段階であればフォース・エイジ (the fourth age) とするというのがものである。本研究は、小田 (2017) も述べている様に「依存・老衰・死の時代」の段階にあるフォース・エイジの高齢者をめぐる「高齢者の発達とは何か」の問いに対する解とも関わる内容を含むものである。

研究の目的は、今後二十年で倍増(一〇〇〇万人増)するフォース・エイジ世代の人生一〇〇年時代におけるライフステージを想定し、地域社会においてICTの学習とその利用・活用による生涯学習を通してのジェロントロジー教育プログラム展開である。彼らに対し生活で役立つ教育プログラムの展開を図り、身体的機能の弱まるフォース・エイジがICT利用・活用を通じてそのプログラムを用いて生涯学習を行う中で、柔軟で多様な社会関係資本を地域に創出することで人々の

の協調行動を活発にし、社会の効率性を高めることのできる組織を生み出すことがその目的である。さらにまた、ジェロントロジー教育を通じてフォース・エイジの新たな肯定的高齢者像を創造することを可能にしたと考えている。すなわち、「依存・老衰・死の時代」の段階においても、インターネット等を



シニアパソコンカレッジ2019



参照：ロバート・D・パットナム

用いて楽しく学び続け、他者とネットワークを取り結ぶことにより、人間としての尊厳を維持しつつ地域社会で豊かな生活を送ることが可能なのではないかとこれまでの研究知見をもとに課題を設定している。

この一連の課題研究の中で、本年度は急激に高齢化が進行している東アジアの台湾・韓国・日本における高齢イメージの調査・研究も同時に進行中である。海外との研究連携では、University of Texas Health Science Center at San Antonio (UTHSA) の協力により、最新のジェロントロジーに関わる情報収集を基に、本学教員との協力・共働のもと、生涯学習場面で地域住民にわかりやすく翻訳・開発されたプログラムを展開し、新たな高齢者像創出を目指すと同時に、UTSA等との研究協力により社会関係資本を地域に創出することに関わる研究を行うことを目指している。

今日の世界は、「グローバル・エイジング」という歴史的な人口革命の入口に立たされている。世界の高齢化は、今後先進国のみならず開発途上国においても急激に進むことが予想されており、二〇一九年現在、世界人口の十一人に一人(九%)が六十五歳以上となっているが、この割合は二〇五〇年までに六人に一人(二六%)へと増加すると予想される中(世界人口推計2019)、人生第四期のフォース・エイジもさらに増加すると想定されている。国連で採択された文書では、高齢化が単なる社会保障と福祉の問題ではなく、全般的な開発と経済戦略の課題であるという新たな認識が示されており、ここでは、高齢化に対する肯定的なアプローチを促進し、これと関連づけることで、否定的で典型的な考え方

を克服する必要性が強調されている。しかし、日本の教育的取り組みは、いまだ断片的である。この様な中で、現在、人々が置かれている社会は、「知識基盤社会」と「知の爆発の時代」、「社会関係資本の再構築」という二つのキーワードで示すことが可能となっている。「知識基盤社会」とは、社会のあらゆる領域において新たな知識・情報・技術の重要性が飛躍的に増大する社会であり、普段我々が見聞きする科学に関する社会的諸問題 (social scientific issues) について、思考し、判断し、意思決定する高度な能力が要求される社会である。この様な社会においては、科学と技術とを切り離して、科学のみを教えることは不自然であるとも指摘されている (Miller, R. & Osborne, J., eds. *Beyond, 2000*)。「知の爆発の時代」とは、多量な情報や知識が次々と新しく生み出される時代である。Luhmann (1993) 的に表現すれば、「客体の文化が持つ」複雑性」を「縮減」し、主体の文化形成にならうように変容させる」ことを目指す戦略が必要となる。さらに、今日人々の心身の健康ともかかわる社会関係資本 (Putnam, 2000) が急激に減少」 (Miller McPherson, 2006) 、少子高齢社会においては、その再構築が望まれている。また、人生一〇〇年代においては、人々に自己効力感と自己体感を持たせ計画し実践・実行と習熟することを後押ししていく必要があるとされている (Lynda Gratton, Andrew Scott 2016)。「ICT利用・活用が高齢者にもたらす影響は「意欲や生活満足度の向上」、「コミュニケーションやアクティビティの増加」、「健康面の改善」であることが示されている (総務省2007)。高齢期における第四期フォース・エイジの人々に対しても新たな高

over *Two Decades*, *American Sociological Review* 71 (3): 353-375, June 2006
 ・ Susan Pinker. *The Village Effect: How Face-to-Face Contact Can Make Us Healthier and Happier*, Random House 2014
 ・ ロバート・D・ハットナム (柴内康文訳)、『孤独なボウリングー米國コミュニティの崩壊と再生』、柏書房 2006
 ・ R. D. Putnam *Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community*, Simon and Schuster, New York 2000
 ・ ロバート・D・ハットナム、クリスティン・A・ゴス(猪口孝訳)、『序章 社会関係資本とは何か』『流動する民主主義・先進8か国におけるソーシャル・キャピタル』、ミネルヴァ書房、ロバート・D・ハットナム編 2013
 ・ 平成19年度 総務省委託調査 高齢者・障害者のICT利活用の評価及び普及に関する調査研究 報告書 高齢者・障害者のICT利活用の評価及び普及に関する検討会 総務省 平成20年 (2007)

齢者像を創造し、多世代と協同し自律的に生きていくことが期待されている。しかし、このフォース・エイジをよりよく生きるためのジェレントロジー教育もその教育を通じての新たな高齢者文化の創造を目指した研究もまだ十分に行われていない。Susan Pinker (2014) の研究では、高齢者の家族関係や社会関係がその心身の健康に重要な役割を果たしていることが示されており、社会関係資本の醸成が少子高齢社会の地域での支え合いを促進していくと考えられており、その中でより肯定的な高齢者像の創造が求められている。ICT利用・活用によるジェレントロジー教育を通じて、いかにしてフォース・エイジの新たな肯定的高齢者像を創造し、人生の最終段階であるこの時期をいかにして人間の尊厳を維持しながら肯定的な生を全うするかを研究していきたい。

【参考文献】

・ Lynda Gratton, Andrew Scott. 『LIFE SHIFT 100年時代の人生戦略』、東洋経済新報社 2016
 ・ Peter Laslett. *The Emergence of the Third Age*, Aging and Society, No.7, 1987
 ・ Peter Laslett. *A Fresh Map of Life: The Emergence of the Third Age*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1989
 ・ Peter Laslett. *A Fresh Map of Life (2nd edition)*, Macmillan Press, UK, 1996
 ・ Jaqui Smith. *The Fourth Age: A Period of Psychological Morality?* Harnack-Haus Forum, December 2000
 ・ 日本老年学会・日本老年医学会『高齢者に関する定義検討ワーキンググループ報告』2017
 ・ 小田利勝『「いま、なぜサード・エイジか」 神戸大学人間科学研究 8・2・2001
 ・ 小田利勝『「高齢者にならざるの発達とは何か」 少子高齢・人口減少社会における高齢者の発達をめぐって』 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要10 (29) 118 2017
 ・ Miller, R. & Osborne, J., eds. *Beyond 2000: science education for the future* <https://www.nuffieldfoundation.org/sites/default/files/Beyond%202000.pdf>
 ・ Niklas Luhmann 社会システム理論 恒星社厚生閣 1993
 ・ Miller McPherson. *Social Isolation in America: Changes in Core Discussion Networks*

■研究活動の紹介

本学生活文化学科 准教授 島崎 あかね

「運動生理学」とはどんな学問領域かご存知でしょうか？一言でいうと『身体活動によって、身体にどのような変化が生じるのか、その現象と仕組みについての基礎を理解する』学問です。「運動」というと、いろいろなスポーツ種目を実施することと捉え、得意・不得意(好き・嫌い)が顕著に表れてしまいがちです。そこで現代では、身体を動かすこと全般を「身体活動」と表現し、「生活活動」と「運動」に分けて考えるようになっていきます(図①参照)。つまり、身体活動とは、「安静にしている状態よりも多くのエネルギーを消費するすべての動作」を指し、日常生活における労働、家事、通勤・通学等を含む「生活活動」と、体力の維持・向上を目的として計画的・継続的に実施される「運動」を合わせたものです。このような観点から考えると、私たちは日々身体活動を行っています。朝目覚めれば、起き上がって身支度を整えたり、朝食を食べたりします。その後学校や会社に向かうために移動し、勉強や仕事をす



図① 身体活動とは

やエレベーターを使わずにできるだけ階段を使う、家事労働での動きを全身で行う、つま先立ちで歯磨きをするなど、ちょっとした工夫で身体活動を増やすことが可能です。身体に対する刺激(負荷)は小さいため、ある程度の継続期間が必要ですが、身体は必ず反応し効果が出てきます。また、歩行をより運動として実施するための「ノルディックウォーキング」があります。両手に二本のポール(ストック)をもつて、積極的に腕を振り歩幅を少し広めに歩く方法です。このウォーキングは、歩行スピードが上がってもポールがあることで四足歩行となり安定感が生まれます。さらにより多くの筋肉を使って歩行するため、通常の歩行よりエネルギー消費量を高めるのが特徴です。日常生活での歩行を積極的に運動に変えることで身体活動量を確保することに繋がります。



る…といった生活活動は誰しもが行っているでしょう。ところが、現代社会はとても便利なものが街中に溢れ、この生活活動においても身体を動かす(使う)機会がどんどん減少している状況です。移動手段として自家用車が普及したり、駅にはエスカレーターやエレベーターが設置されたりするなど、人間の移動手段の基本である歩行の機会が減少しています。また、家事労働や生活スタイルをみても便利な道具が開発・普及されたことで省力化が進み、快適で生活しやすくなっています。さらにスマートフォンやパソコンの普及により、全世界で起こっている事柄もその場で確認することができるようになりました。その結果、私たち人間の身体はどんどん「運動不足」となり、「体力の低下」や「生活習慣病」が危惧されています。

このような背景から、私は特に中高年齢者の健康増進に必要な身体活動の実施と生活習慣病の関係について研究を進めてきました。若いころから運動習慣がある人は、健康の維持増進のため日常生活に身体活動を取り入れやすいかもしれませんが、運動習慣がなかったり運動自体が苦手という人にとっては、「運動」というキーワードすら抵抗があるかもしれません。また社会人になると運動やスポーツをする時間を確保することが難しく、身体活動と疎遠になってしまっている人も少なくありません。そこで、改めて「運動」を取り入れるだけでなく、日常生活のあらゆる場面に付随した「ながら運動」のような形で身体活動を増やすことをお勧めしています。例えば、通勤・通学時の歩行を少し息が弾むくらいのスピードで行ったり、エスカレーター

一方、運動する環境についての研究も行っています。地球温暖化の影響で、近年の日本の夏の暑さは異常な状態となり、その影響で熱中症による救急搬送者数や死亡者数が増加しているという状況が続いています。熱中症発症の実態や暑熱環境に対してヒトの身体はどのように影響を受けるのかなどを調査・分析して、熱中症の発症予防についてまとめています。私たちの身体は環境温度が高くなると、汗をかくことで体内の熱を放出しています。運動時も同様に、運動によって体温が上がると汗をかいて体温を一定に保とうとします。しかし、運動強度が高い場合や暑熱環境では汗の放出による体温調節がうまく働かず、身体の中に熱が蓄積してしまいう熱中症を引き起こします。子どもや高齢者は体温調節機能が未熟であったり低下しているため、十分な放熱ができず熱中症になりやすいと言われています。また若い人や十分にトレーニングを積んでいる人でも、身体が暑さに慣れていない時期には熱中症を発症する危険性が高い状況です。そこで、暑熱環境下でも安全で快適な生活を送るためにはどのような対策をとっておいた方がいいのか、学生や選手にどのような教育が必要なのか、ということについて研究を進めています。

人々が健康で快適な生活を送るために、日常生活における身体活動量を増やして充実した毎日を送る…、これが生活の質の向上にも繋がる重要なことだと考え、身近なところからの取り組みを発信していけるよう、研究に励んでいます。

■幼児保育専攻の就活体験

本学生活文化学科 専任講師 大澤 朋子

秋も深まったある日、保育・教育職で内定を得た幼児保育専攻四年生六人に集ってもらい、就活体験座談会を開催しました。

小野瑞希さん（静岡県公立小学校教諭）
木村知佳さん（茨城県A市の保育士）
中野朋香さん（神奈川県社会福祉法人立乳児院保育士）
山内彩織さん（東京都社会福祉法人立保育所保育士）
豊岡葉南さん（東京都私立幼稚園教諭）
堀田夏花さん（東京都B区の保育士）

その職種を受けようと決めたのはいつ頃で、決め手はなんでしたか？ また求人情報はどのように収集しましたか？

小野 はつきりと決めたのは小学校実習後です。東京で就職するかどうかも迷いましたが、家族とも相談して地元に戻ることにしました。

堀田 実習前は幼稚園教諭を目指していましたが、保育実習と教育実習を経験して、保育所がいいと思うようになりました。

豊岡 自分が幼稚園の頃から将来は幼稚園の先生になると決まっていた。五月の幼稚園フェアに参加して、井口先生の

中野 九月中旬に履歴書を持って面接に行き、その場で決まりました。筆記試験はありませんでした。ポランテアで通っていたので、お互いによく知っていたことが大きいかなと思います。ほかに検討していた施設は小論文と面接試験があるようでした。

木村 三次試験までありました。一次試験は筆記で一般の問題と小論文と専門試験。二次試験は集団面接、三次試験が個別面接でした。最初の試験が六月なので、四年生の四月に五月に集中的に勉強しました。合格通知が来たのは八月です。

豊岡 五月のフェアのあと、園見学に行き、夏休みにもいくつかの園を見学しました。九月にもう一度最初の園に見学に行き、その場でエントリーしました。試験は一〇月半ばで、翌日結果の通知がありました。随時募集だったので、ほかの受験者が先に決まってしまうたらと焦る気持ちがありました。

☆公務員と私立や社会福祉法人で準備の時期がかなり違うようですね。

大学の就職ガイダンス等ははどうでしたか？

豊岡 幼児保育専攻の学生向けに求人票の見方を教えてくれるガイダンスがあると聞いていましたが、なかったよね？

山内 エントリーシートを出すときには学科の先生に見てもらい、面接の練習もしてもらったので、キャリア支援課には行っ

先輩にあたる先生がいらしていた園に決めました。大学に来ていた前年度の求人票も四月頃は参考にしました。

山内 三年次の保育所実習後にアルバイトのお誘いがあり、保育所もいいなと思っていました。一応幼稚園実習も経験したあとに決めました。

中野 三年生の施設実習を乳児院で行い、それからずっと乳児院と決めてきました。春休みにいくつかの施設に見学に行き、子どもと接している時間が長くていいなと思ったところに決めました。それがたまたま四年次の実習先でした。

木村 公務員試験が六月で、幼稚園実習前だったので、幼稚園を選ぶことには不安がありました。保育士枠なら児童館への配属もあるので、いろいろできるかなと思って決めました。

☆小さい頃からの夢を実現した人もいましたが、実習の体験が決め手になった人が多いようですね。

いつ頃、どのような準備をしましたか？ また採用試験はどのような内容でしたか？

堀田 公務員試験にはチャレンジしようと思っていました。三年生の二月に大学で公務員対策講座を受けて、そのあとからしっかり勉強しようかと心に決めたんですけど…（笑）試験が六月だったので、本格的に勉強を始めたのは四月です。

小野 四月がエントリーだったので、自分の誕生日にエントリーして、そこから勉強を始めました。

ていねいです。

中野 夏休み中に履歴書の書き方をキャリア支援課の職員に教えてもらいました。少し怖かったけれど、丁寧なアドバイスをもらいました。面接の想定問答集ももらい、自分で練習しましたが、実際の面接はもっとフランクでした。

☆みなさんキャリア支援課にはあまり頼らず、学科の先生を活用したようです。一般企業と活動時期が異なることで利用しにくかったのかもしれないね。

実習等とはどのように両立させてきましたか？

木村 一次試験の翌日から幼稚園実習で、実習途中で結果が出ましたが、実習が終わるまでは二次試験の準備はできませんでした。二次試験が七月半ばだったので、実習が終わってから準備をはじめました。

小野 小学校・幼稚園とも実習が終わったあとの試験だったので、時間的には余裕がありました。

堀田 実習の翌日が二次試験でした。一次が合格するかどうかわからないまま、一応面接練習はしていました。でも実習中なので試験の準備どころではなかったです。

山内 時期は重ならなかったですが、三年次の実習園と四年次の実習園とで迷いました。実習の翌週が試験だったので、実習の延長のような面接でした。

☆実習期間と就活期間が重なってしまい大変な人もいたようです。しかし実習中は実習最優先ですね。



一般企業の就活と時期が違いますが、焦りはありませんでしたか？

堀田 企業で決まった友人から就活結果を聞かれると焦りました。保育職の就活のことが分かっていない人だと余計に。

豊岡 「決まってるよね、どうなった？」と聞かれると、「いやこれからなんだよ！」みたいな(笑)

木村 でも一般企業を受けた友人から面接のアドバイスをもらえたのはよかったです。ぜんぶ覚えていくより、話したいトピックだけを決めておいて、その場で話す方がいいよと言われました。

☆他学科のお友達とは話が噛み合わなかったり、忙しい時期が異なって遊びに行く予定が立てづらかったかもしれませんね。就活時期が遅い分、アドバイスをもらえるのはお得ですね。

一番大変だったことは？

豊岡 精神的に。ほかの人が先にエントリーしたらどうしようと思って。ここで決めちゃっていいのかという思いと、準備状況と。だからといって他を探す気にもなれなくて。友達に「やってみなくちゃわからないでしょ」と言われ、嫌なところもなかったので飛び込んでみる気になりました。

小野 勉強は大変だったけど、幼小コース七人で勉強していたので。地域で試験は違っても内容はそれほど変わらないので。体育や音楽の実技試験がある県もあるんですけど、静岡はなしでした。集団面接の練習にもちょうど良い人数でした。

山内 履歴書に自分のアピールを書くのが大変でした。良いところばかりでも悪いところばかりでもダメだし、悪いところをどう良くしていきたいかアピールするのが大事と先生からアドバイスを受けて、それを考えたり、卒論とも並行しながら仕上げるのが大変でした。

中野 キャリア支援課の人と予定が合わなくて、履歴書を仕上げたのに一カ月くらいかかりました。自分にできることはあっても、それが施設にとって役立つことなのか迷ってしまいました。

豊岡 就活の進捗状況をあまり人に言えなかったですね。小野 結果が出始めた頃、お互いに用心深くなります。それまで一緒に勉強していたのに、急に情報を閉ざしてしまつて。☆企業就職と違い、同時に複数の園や学校を受けられない保育・教育職は、受験先選びに慎重になります。同級生とも仲が良かっただけに、合格したことを言いつらい雰囲気があったようです。

大学時代の経験で役に立ったことは？

小野 ボランティアは大きかったです。いろいろなジャンルのボランティアを経験したので。

木村 サークルの経験が役に立ちました。個人面接で大変だったことを聞かれたので、友人の話も少し織り交ぜながら話りました(笑)

堀田 実習の翌日が面接だったので、「昨日まで実習でした」というアピールをしました。面接官に保育士もいらしたので、興味を持って聞いてくれました。

小野 教育学部ではなく、生活文化学科の出身ということはアピールできました。教育だけでなく衣・食・住についても学んできたことが役に立ちました。

☆四年間さまざまなボランティア活動をしてきたことがアピールできましたね。

後輩へのアドバイスをお願いします

豊岡 園見学のときに実際に保育に入らせてもらって、子どもたちの様子もわかったし、現場の先生方にもいろいろ伺えたのがよかったです。お薦めします。

山内 受けようと思っている園で実習するのも良いかもしれませんが。見学だけではわからない雰囲気も良くわかるので。

木村 公務員は複数の自治体を受けることもできるので、試験の早い自治体を練習のつもりで受けてみるのも良いかも。

中野 ゼミの先生に相談すると、いろいろな園の情報をお持ちなので教えてもらえます。

堀田 早めに勉強を始めること。

小野 でも実際には四年生になってからだよね(笑)

☆情報収集をして、見学だけではなくボランティアや実習で園をよく知るとともに、自分のことも知ってもらうことが良いようですね。そして試験準備はお早めに！

保育・教育職の就活のリアルな体験を語っていただきました。みなさんありがとうございました。

■特別支援学校で家庭科を教えて… 大学生生活と変わったこと

東京都立特別支援学校教諭 黒澤 美月
(生活文化学科生活心理専攻二〇一八年度卒業生)

私は実践女子大学を卒業後、東京都立の特別支援学校・高等部で教諭として働いています。まだ働き始めて少ししか経っていませんが、大学生の生活とがらりと変わった、現在の生活を紹介したいと思います。皆様の就職の参考に少しでもなればうれしいです。

私は特別支援学校に通う、障害のある高校生に家庭科を教えています。一クラスに十名の生徒がいて、補助（ST）の先生と二人体制で授業を行っています。主に、調理実習や被服製作を中心に授業を計画しています。さらに住居や消費の分野なども加わります。生徒一人ひとり特性が異なるため、教材研究や板書計画は欠かせません。また、STの先生と本時の目標や流れを共有するために略案は必ず書くようにしています。初めの頃は、こんな授業にしたい！と思う余裕はありませんでしたが、最近は生徒に何を学んでほしいのか、どうすれば伝わるのか、考えながら授業を展開するように心がけています。授業を行う上で大切にしていることは、全てに根拠を持つことです。被服専門ではなくても、栄養専門ではなくても、教壇に立つて話すということはその分野のプロだと思われれます。恥ずかしい話ですが、生徒からの質問に答えら

興味や買いものなどをして過ごしています。だからだと過ごす大学生生活も楽しかったですが、メリハリのあるいまの生活も充実しています。

他にも大学生生活の自分と変わったな、と思うのが本を読むようになったことです。月に何冊読むとは決めていませんが、継続して読むようにしています。ほとんどが教育に関する本です。学生時代を振り返ると先生から「本を読め」と言われてきましたが実行することはありませんでした。しかし、社会人になり、私は本を自分から探し、読んでいます。それは先生という職業に就いたからだと思います。私は先生という仕事は一生学び続ける職業だと思っています。学生の頃は自ら学びに行かなくても、講義や先生の話で自動的に新しい知識を学ぶことができました。しかし、社会人になったら誰も手取り足取り教えてくれる人はいません。本を読むことだけではなく、周囲の先生にアドバイスをいただいたり、他の授業を見学することを積極的に行っています。学生時代は受け身でしたが、積極的になれたことが一番の変化かもしれません。

大学生生活の中で就職した自分の姿をイメージすることは簡単なことではないと思います。実際に私は大学生生活中、一生この生活が続いてほしいと思っていました。でも時間は有限です。私はいまもしも大学生生活に戻れるなら、もっと講義に集中して参加したいです。調査・検査法のWISCIV（知能検査）の授業や臨床心理学の授業は、いまも時間があつたら参加したいくらいです。大学で学んだことは、職種にもよりますが、

れなかったり、授業のゴールが自分で分からなくなってしまった時がありました。一生懸命に質問してくれた生徒、一生懸命に話を聞いてくれた生徒に申し訳なくなりました。その時に私が指導教諭から言われた言葉が「何事にも根拠をもつ」とです。なぜ火は中火なのか、なぜボタンをつけるのか、細かいところまで理由を探し、自分自身で単元の理解を深めるようにしています。

また、授業だけではなく、クラスの学級経営も先生の仕事です。私は一年生のクラスの副担任をしています。主担任の先生と組むと決まった時、周りの人たちから「学級経営のプロだからこの一年でたくさん学べるよ」と言われました。その時の私はいまひとつピンときていませんでしたが、近くで見ているとその凄さが一年目の私でも感じます。素晴らしい先生と組ませていただいたことは、私の今後の人生の財産になると確信しています。学級経営やホームルーム活動は大学の講義ではなかなか学ぶ機会がないと思うので（私が忘れていただけかもしれません）、教員を目指している人は、学校公開や研修などに参加してみるのもいいと思います。その他にも、委員会や部活動の指導もあります。

平日は学校に終日いるので、自由な時間は土日だけになりました。大学生生活からは考えられない生活をしています。大学生の時は無限に時間があるような気分でしたが、今は限られた休みをどう有効活用するかに力を注いでいます。休みに友達と遊ぶことは何よりもリフレッシュになります。他にも、教育の現場なら必ず役に立ちます。私のように、大学で学んだはずなのに忘れていて、自分で勉強しなおすことにならないように、いまの環境を大切にしてください。

私は大学時代のゼミで、障害のある幼児への臨床活動に参加していました。特別支援学校の先生になりたいと思ったきっかけでもあります。幼児との関わりを通して、自分の考え方やものの見方が全てではないということ学びました。一人ひとりと、考え方やものの見方は異なります。それは障害の有無と関係ありません。大切なのはその人が何を考え、感じているのかを理解しようとする気持ちだと思います。人として当たり前のことを、臨床活動を通して幼児に教えてもらいました。実際に学部生が学内で臨床活動を行うことができるのは、実践女子大学の他にはわずかだけだと思います。貴重な経験をさせていただきました。ゼミの臨床活動での経験は、私が教育の現場で働くための基礎をつくってくれたのではないかと思います。一人ひとりのニーズに合わせた説明や教材の準備をすることなどは、特別支援学校であっても、小学校や中学校、高校であつても同じなのではないでしょうか。

たくさん偉そうなことを書いてしまいましたが、私もまだまだひよっこです。つらいこともあるし、悲しい時もあります。うまくいかない時もあります。でも楽しい時もあるし、うれしい時もあります。そう思うことができる職業を選択することができて良かったです。成長し続けるためにも、謙虚な気持ちを忘れず、学び続けることを忘れずに日々を過ごしていきたいです。

■ 一型糖尿病(小児糖尿病)児の保育における配慮事項

生活文化学科 幼児保育専攻四年 伊東 実咲

一. はじめに

現在の日本において、一型糖尿病(小児糖尿病)は、十万人に二〜三人が発症する稀な疾患である¹⁾。一般社団法人日本小児内分泌学会のアンケート調査では、一型糖尿病を発症している乳幼児に対して幼稚園や保育園が入園を断ったり、難色を示したりするケースがあることが報告されている。その理由として、一型糖尿病児の保育についての経験や知識がないこと、トラブルが起きるリスクへの配慮等がある。また、入園を許可されてもインスリン注射は必ず保護者が来園して行う等の条件がつくことが多いという²⁾。このような園側の理由や入園条件から、一型糖尿病児の社会的生活の場が必要以上に損なわれたり、保護者へ多大な負担がかかったりするという現状がある。他には、一型糖尿病児が定期的に必要な血糖値測定やインスリン注射は医療行為にあたり、医師法第十七条に「医師でなければ医業をなしてはならない³⁾」と定められていることで、保育者が行うことができないという制度上の問題点もある。けれども一型糖尿病児は、日常生活において血糖値測定とインスリン注射を必要とするが、それ以外のことに關しては健常児とほとんど変わらない対応でよい。また、血糖値測定とインスリン注射は、四〜五歳になると自分で全て行うことができるようになる。このように、健常児とほ

んど変わらない生活が出来る中、一型糖尿病を発症しているというだけで入園を断られてしまう、または難色を示されてしまうことで、子どもの社会的生活の場が必要以上に奪われたり、保護者へ多大な負担がかかったりするのは望ましくない。そこで、一型糖尿病児やその保護者のために、この現状の打開策を探りたいと考えた。

本研究では、日野市の公立幼稚園・保育園の保育者を対象に一型糖尿病に関する認知度等の実態調査を行う。さらに、保育者養成校担当教員や保育園常勤看護師へのインタビュー調査、文献調査を踏まえ、一型糖尿病児の保育において行うべき配慮事項を明らかにする。その上で、一型糖尿病児ができる限り健常児と同様の生活を送れると共に、保護者が安心して子どもを預けられるための「園の対応マニュアル案」を作成することを目的とする。

二. 文献調査

(一)「一型糖尿病」とは

一型糖尿病とは、「 β 細胞の破壊的病変でインスリンの欠乏が生じることによつて起こる糖尿病」と定義されている⁴⁾。治療方法については、インスリン療法が一般的である。また血糖値のコントロールを行うため、定期的に血糖値測定を必要とする。

(二)教科書調査

「小児保健」に関する保育者養成用教科書(六冊)では、一型糖尿病についてどのような記述がなされているのか調査を行った。その際、

一型糖尿病児の保育を行うにあたり、保育者が知っておくことが望ましいと考えられる項目を選定し、分析を行った。調査の結果、全ての項目が当てはまる教科書は無く、一型糖尿病に関する説明が十分な教科書が無いことが分かった。

(三)事例調査

日本小児内分泌学会糖代謝委員会の「一型糖尿病児に対する幼稚園・保育園の入園拒否の実態」と「継続した医療的ケアが必要な患者の復園と就学準備への支援」(山本、二〇〇六)を基に事例調査を行った。在園時に一型糖尿病を発症した場合は比較的受け入れられやすいが、入園前に発症した場合には、一型糖尿病児の受け入れに抵抗感のある園が多いという現状が明らかになった。また、在園中に一型糖尿病を発症し復園したという事例から、一型糖尿病児を受け入れるにあたり園側にとつて医療者の協力を得られることは心強く、一型糖尿病児やその保護者にとつても園生活を送る上での重要な条件となっていた。

三. 調査対象と方法

(一)保育者へのアンケート調査

調査対象…日野市公立幼稚園教諭十六名・保育士十六名の合計

三十二名(幼稚園四園・保育園二園)

調査期間…二〇一八年七月中旬から下旬まで

調査内容…一型糖尿病児に関する認知度のアンケート調査

(二)保育者養成校担当教員へのインタビュー調査

調査対象…本学「小児保健」担当専任教員Sと元専任教員H

調査期間…二〇一八年十二月

調査内容…「小児保健」の授業において一型糖尿病について取り扱う

のか、また授業内で一型糖尿病を取り扱うことはどの程度重要視されるのかに関するインタビュー調査

(三)保育園常勤看護師へのインタビュー調査

調査対象…日野市内私立T保育園常勤看護師一名

調査期間…二〇一八年九月

調査内容…一型糖尿病児の受け入れ態勢や受け入れの際に危惧する

こと等に関するインタビュー調査

四. 結果と分析

(一)保育者へのアンケート調査

糖尿病に関する認知度は一〇〇%であったが、一型糖尿病に限定した場合の認知度は五〇%であった。症状等の詳細に関する認知度はさらに低い。

(二)保育者養成校担当教員へのインタビュー調査

「小児保健」の授業において一型糖尿病を取り扱っているが、重要視はされていない。取り扱ったとしてもパワーポイントのスライド一枚程度であり、詳しくは取り扱っていないかった。

(三)保育園常勤看護師へのインタビュー調査

一型糖尿病児を受け入れていない私立T保育園常勤看護師へのインタビュー調査から、医療機器の取り扱いに關しての問題点や、常に一型糖尿病児に目を向け、対応することの難しさが見えてきた。また、万が一保育者が見ていない時に一型糖尿病児が低血糖を起こして倒れてしまうことを特に危惧していた。

五．考察

一型糖尿病は子どもの病気であるにも関わらず、一型糖尿病について保育者の認知度は低かった。それは、あまり現場でみられないために「小児保健」の授業では詳しく取り扱われず、教科書にも情報が詳しく記載されていないことよって起こっていると考えられる。そのため、現場には知識が浸透せず、何らかのトラブルのリスクを恐れる保育現場では、安全性を取って一型糖尿病児の受け入れを行わないという結論にたどり着きやすくなるのだろう。その結果、一型糖尿病児の入園を、知識がないから、やゝ経験がないから、という理由で断ることが多いのではないかと考えた。

保育者がインスリン注射や血糖値測定という医療行為を自由に行うことができないという制度上の問題は、保健師助産師看護師法第五条に「この法律において『看護師』とは、厚生労働大臣の免許を受けて、傷病者若しくはよく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とする者をいう⁵⁾」と定められているため、園に看護師を配置することでインスリン注射や血糖値測定を行うことが可能になり解決できる。今回作成したマニュアル案（掲載は省略）のように、具体的手立てを考えておくことで、保育は可能になるといえる。

六．おわりに

一型糖尿病児の保育における対応マニュアル案を作成した。一つひとつの保育場面を想定し対応案を出したが、園によって活動の仕方が違うため、どの園でも参考にできるような対応マニュアル案を作成することは、なかなか困難であった。また、保育者の動きを考え、で

■ 造形指導を行う専任講師の専門性

— 子ども主体の活動の実現に向けて —

生活文化学科幼児保育専攻四年 水野 葉月

一．問題と目的

近年、体育や英語等の教育的な活動を取り入れている幼稚園や保育園があるが、なかには専任講師が携わる園もある。しかし、造形指導を行う専任講師はさほど多くなく、その専門性に関しても明らかにされていない。そこで子どもが主体となつて取り組むことのできる造形活動を、子どもと関わる時間が少ない専任講師が行う際の特長や配慮事項を探りたいと考えた。専任講師の専門性を明らかにすることは、保育者としてどのように造形活動を考えるか、また専任講師とどのように連携するかを考える手がかりにもなることだろう。

本研究では文献調査に加え、東京都A保育園で行われている「アートの時間」における造形活動の事例観察調査から、子ども主体の活動の実現に求められる専門性について考察することを目的とする。

二．造形指導に求められる専門性

文献調査により、子ども主体の造形活動における指導者のあり方として「①活動意欲の湧く環境構成、②安全で安心な環境構成、③表現が広がるような環境構成、④共感や寄り添い、⑤間接的指導や見守り、⑥技術的な指導、⑦イメージを豊かにする働きかけ、⑧自身が楽しむ姿勢、⑨子どもの主体性を重んじる姿勢、⑩保育者との情報・意見交換」の十項目が求められることが明らかになった。

できるだけクラス全体を巻き込むことなく一型糖尿病児の対応を行うにはどのようにしたらいいのか考察することが特に大変であった。一型糖尿病児の保育としては、看護師を一型糖尿病児の加配としてつけることが、園側や一型糖尿病児、その保護者が一番安心でき、なおかつ保育全体がスムーズにいくことに繋がると思われる。しかし、加配として看護師をつけられるように園の体制が整っているところは少ないのが現状である。そのため、一型糖尿病児の対応は主に保育者が行い、インスリン注射や血糖値測定が関わってくる場合のみ看護師の協力を得るという方法を考えるべきであるとの結論に達した。その場合を想定し、この一型糖尿病児の保育における対応マニュアル案を作成したが、いつかこの対応マニュアル案が役に立つことを願っている。

【引用・参考文献】

- 1)よくわかる最新医学 小児糖尿病・ヤング糖尿病 田嶋尚子主婦の友社(二〇一九)pp.
- 2)日本小児内分沁学会糖代謝委員会「一型糖尿病患児に対する幼稚園・保育園の入園拒否の実態」に関する日本小児内分沁学会評議員へのアンケート調査報告書(二〇一七)pp.
- 3)厚生労働省 医師法(昭和二十三年七月三十日法律第二〇一号)第十七条
- 4)ヴァジュアル 糖尿病臨床のすべて 小児・思春期糖尿病の対応マニュアル 池上博司 中山書店(二〇一七)pp.
- 5)厚生労働省 保健師助産師看護師法(昭和二十三年法律第二〇三号)第五条
※個人情報取り扱いに関しては、研究倫理に則り、十分に配慮している。

三．調査対象と方法

(一) 専任講師による造形指導の実際

調査対象…東京都目黒区私立幼稚園十九園と保育園二十九園

調査期間…平成三十年十二月

調査方法…東京都目黒区役所及び各保育園公式ホームページより、専任講師による指導の実態を調査する。

(二) 専任講師が携わる造形活動の観察調査

調査対象…東京都目黒区私立保育園三、四、五歳児各三十名

専任講師一名、保育者九名

調査期間…平成三十年八月～十二月(計十一回)

調査方法…専任講師による造形活動の時間「アートの時間」における子どもの様子や専任講師及び保育者の働きかけを観察する。筆記によりエピソード記録をとった上で、作成した十項目の指標に基づき、行動観察分析を行う。

四．結果と分析

(一) 専任講師による造形指導の実際

東京都目黒区では、私立幼稚園が八二%、私立保育園が三九%という割合で専任講師による指導が行われている。そのうち造形指導が行われている園は全体で約二二%と、専任講師による指導がさほどなされていないことが分かった。

(二) 観察調査で得られた専門性の項目

保育園での観察結果に基づき、文献調査で得られた「造形指導に求められる専門性」十項目を指標として分析を行った。

＜表1 造形指導に求められる専門性が見られた項目＞

	8月21日	8月22日	8月28日	9月18日	9月25日	10月9日	10月16日	11月13日	11月20日	11月27日	12月4日	12月11日
①活動意欲の湧く環境構成	◎			○	◎		○				○	○
②安全で安心な環境構成							○	○	○		○	○
③表現が広がるような環境構成	○		○	○	○							
④共感や寄り添い	◎		○			○	○	○	◎		◎	◎
⑤間接的指導や見守り	○		○				○		○		◎	○
⑥技術的な指導	◎		◎	◎	○		◎	○	◎	◎		◎
⑦イメージを豊かにする働きかけ	◎		○	◎		◎		◎				
⑧自身が楽しむ姿勢	○				○	◎		○				◎
⑨子どもの主体性を重んじる姿勢	◎		○			○	○					○
⑩保育者との情報・意見交換			○			○	○		○	○		

観察調査のエピソード記録（詳細は省略）の中に出現した項目を○、高頻度あるいは長時間見られた項目を◎として、表1に示した。

五. 考察

(一) 専任講師の特長

子ども主体の活動の実現に向けて、造形指導を行う専任講師に求められる姿について文献調査と観察調査から得られた内容をまとめた。

〈心掛ける指導者の姿勢〉

子どもの「やりたい」「こうしたい」という気持ちを大切に、子ども主体性を重んじる姿勢が必要である。そのためには、子どもの発見や気づきにも敏感になって、あらゆる感じ方・楽しみ方を広げ続ける姿勢をもつことが望まれる。

〈環境構成と関わり〉

・ 技術的な指導

豊かな知識や技術を活かし、子どもの思いに即しながら、素材・画材の多様性や可能性等、技術的な指導を行うことが、子どもの「できないかもしれない」といった不安な気持ちの軽減や「こうしたい」という活動意欲の向上に繋がる。そして、子どもの表現の幅が更に広がっていく。また道具の使い方については、子どもの手先の発達等を考慮しながら、子ども一人ひとりに合わせた関わりを意識することが大切である。

・ イメージを豊かにする働きかけ

活動の導入場面では、イメージを限定しないで伝えたり、素材を見る・触る・感じることはじめ、自分なりのイメージが持てるよう関わったりしていた。また他児の姿に目が向くように声を掛けたり、手を

取って友達の姿を見に行ったりすることで、他児の様々な取り組みを知り体験ができる。

・ 共感や寄り添い

子どもが自分で作ったことや発見したところ、湧き出る感情を肯定的に受け止め特徴を捉えて言葉で表す。自分の表現したものを専任講師に認められることが、自信に繋がる体験となる。

〈他者との連携〉

・ 保育者との連携

造形活動の前後の時間にも、保育者と専任講師がそれぞれ見た子どもの姿を伝え合ったり情報を共有したりすることで、子どもの興味・関心等、子どもについての理解を深められる。また、専任講師から新しい素材・画材、その使い方を発信する一方、保育者から保育の意図を伝える等、それぞれの専門性を発揮しながら、子どもの姿に即して造形活動を柔軟に支えていくことが大切である。

・ 保護者への発信

子どもの造形活動は、幼稚園や保育園に限らず、家庭でも展開されるものである。子ども主体の活動を実現するために、保護者の理解や廃材の持ち寄り等の協力が必要である。専任講師が、造形活動で大切に考えていることや子どもの様子を伝えることで、保護者は保育者の視点だけではない多面的な子どもの姿に気づくことができる。

・ 記録の蓄積

項目には示していないが、専任講師は造形活動の計画と振り返りを記録として残しておく必要がある。その蓄積された記録から、長期的な振り返りをして子どもの成長の過程を捉えることが大切である。また、造形活動の流れ、子どもの様子や興味・関心、指導や関わり

の反省点を知ること、連携を図る上でも重要となる。

(二) 専任講師が配慮する内容

〈現状〉

基本的な安全は確保されていたが、材料があちこちに散らばっていたり、床にはさみが落ちていた状態が見られ「②安全で安心な環境構成」の項目はあまり多く見られなかった。専任講師は子どもの表現する意欲や夢中になる姿を優先的に考えている。しかし、はさみは扱い方によって怪我の危険性も懸念される。道具の使い方について体験する場を設ける必要がある。

〈改善策〉

安全で安心な環境構成のために、まず保育者との連携が必要である。子どもの作りたいという気持ちや夢中になる姿を大切にするためには、保育者が事前にはさみの使い方や渡し方を確認する時間を設けることと、活動場所に分かりやすいポスターを貼る等の工夫をすることが求められる。これにより、造形活動時に集中力を持続させることが可能になる。

(三) 造形指導に求められる専門性の項目の検証

文献調査や観察調査に基づく考察から、「保護者への発信」の項目を加えた十一項目を造形指導に求められる専門性として確定した。

【引用・参考文献】

http://www.city.nagano.lg.jp/kyorashi/kosodate/index.html
 (二〇一八年十二月十五日アクセス)
 ※個人情報の取り扱いに関しては、研究倫理に則り、十分に配慮している。



宮古市役所への表敬訪問



三王地区センターでの活動



田老学童の家での活動

に赴き、班に分かれて宮古市内のさまざまな地区の仮設住宅や災害公営住宅、児童館などで学生と現地の方々の交流を持っています。学生は事前に準備した活動（小物づくり、軽体操など）や、現地婦人会の方から郷土料理を教えていただきながら、震災当時や復興についての話を伺いました。

■東日本大震災岩手県宮古市
支援プロジェクトについて

本学生活文化学科 教授 松田 純子
本学生活文化学科 准教授 島崎 あかね

未曾有の東日本大震災から早いもので八年が経過しました。本学では震災の年から、個々のレベルで、あるいは学園全体のプロジェクトとして被災地支援を行ってきています。岩手県宮古市に対する支援は、宮古市出身の卒業生を通じて現地の方々との交流を中心にボランティア活動を行っています。支援開始当初は、週末に夜行バスを利用して月に一回のペースで現地に赴き、音楽の会や写真立て作りなどの活動を行ってきました。平成二十七年からは、夏休み期間を利用して現地に



「音楽の会」の活動

また防災学習として、現地ボランティアの方による「学ぶ防災」プログラムにも参加し、田老地区を歩きながら震災から街がどのように復興しているかを見学したり、震災遺構である「たろう観光ホテル」の中で津波のビデオを見たりすることで、その被害の大きさを体験的に学んでいます。現地に赴くのは限られた日数ですが、他にも九月に目黒駅前で開催される「目黒のさんま祭り」でのボランティア（さんま祭りでは宮古市で水揚げされたさんまが振る舞われています）、十月・十一月に行われる学園祭（常磐祭）での活動報告展示・宮古市の特産品や婦人会の方の手作り品の物販、年度ごとの報告書の作成なども行っています。

現地での活動の際、学生はピンクのTシャツを着用していますが、少しずつ現地の皆さんにも認知していただけるようになり、「ピンクのTシャツを着た学生さんたちがまた来てくれたんだね」と声をかけてくださる方もいます。

現地の方が求める支援は年々変化していきます。震災当時は瓦礫の撤去や生活や街を立て直すことなど、ハード面での需要が大半を占めていたと思いますが、時が経つにつれ心のケアなどソフト面での支援が求められています。今年度の現地活動で宮古市役所を訪れましたが、副市長さんからも「人と人との繋がりや心のケアはこれからも続けてほしい」「震災のことを忘れないでほしい」といったお言葉をいただきました。少しずつ復興が進み、街の様子も変わっていきませんが、震災を忘れず被災した方々の心に寄り添う活動は、これからも続けていきたいと思っています。

実践女子大学 生活文化フォーラム 第24号

2020年3月4日発行

編集者 生活科学部生活文化学科

発行者 (ホームページ <https://www.jissen.ac.jp/learning/hles/seibun/>)

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1

TEL 042-585-8918

FAX 042-585-8919

実践女子大学ホームページ <http://www.jissen.ac.jp>

〔編集企画〕協力・印刷所

日野テクニカルサービス株式会社

〒191-8660 東京都日野市日野台3-1-1

TEL 042-586-5062

FAX 042-586-8944